
魔法少女リリカルなのはFate ～赤き錬鉄の魔術使い～

Shin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはF a t e 　　く 赤き錬鉄の魔術使いく

【Nコード】

N 4 1 7 4 N

【作者名】

S h i n

【あらすじ】

聖杯戦争から十数年後。

聖杯戦争を遠坂凜とセイバーと共に生き残り、暫らくは騒がしくも平穏な日々を過ごしていた衛宮士郎。

しかし、ある事件をきっかけに彼女達と袂をわかった彼は、ただ一人『正義の味方』を追い求め続ける。

その中で、彼はとある町で外道魔術師と戦い倒すが、魔術師の開いた『孔』に飲み込まれてしまう。

——そして・・・

彼が目覚めた場所。それは元の世界と酷似した、しかし全く異なる『魔法』が存在する異世界。

そして目の前にいたのは、強大な魔力を持つ一人の幼い少女と、言葉を話すフェレットだった。

彼の登場で、小さな少女達の物語は本来の道筋を外れ、新たな物語を紡ぎだす。

序章（前書き）

この作品は独自設定でんご盛りです。

この作品は『魔法少女リリカルなのは』と『Fate/stay night』のクロス二次創作物です。

知識不足のため、独自設定を多数用いています。

こういった趣向のものがお気に召さない方はご遠慮ください。

私は文章を考えたりを書いたりすることが得意ではありません。正直言って苦手です。

駄文ではありますが、気が向いたらお読みください。

ご意見や感想を頂けたら幸いです。

なお、この作品は原作「魔法少女リリカルなのは」や「Fate/stay night」本編とは一切関係ありません。

また、作品内には一部流血などの残酷的な描写がありますので、ご注意ください。

序章

夕焼けの光が差し込み、赤く染まる車内。

カタンカタンと規則正しく車輪がレールの上を走る音と振動が眠気を誘う。

赤く染まったその電車の車内に殆ど乗客はいなかった。

ただ3〜4人がバラバラに席に座っているだけだった。

だがその中で特に目立つ男がいた。

身長は立っていれば190cmはあろうかという長身で肌は褐色。

そして頭髮は老人のような白髪をしていた。

若干茶色を帯びた灰色の瞳は外の風景を映しており、心ここに在らずといった様子である。

彼の胸中に浮かぶのはこれまでの様々な出来事だった。

——彼の名は衛宮 士郎。

12年前、冬木という街で起こった第五次聖杯戦争を生き残った魔術師である。

彼は過酷な聖杯戦争を、自身のパートナーであり魔術の師匠となってくれた遠坂 凜と、自身が召還し紆余曲折を経て凜の使い魔となり、それでも士郎を主として慕ってくれたセイバーと共に生き残った。

聖杯戦争後は高校を卒業するまでの間、間桐家の縛りから解放され再び凜の妹となった遠坂 桜、その使い魔であるライダー、士郎の義父である切嗣の実の娘イリヤスフィール・フォン・アインツベルン、そして士郎が姉と慕う藤村 大河を加えた7人で賑やかに、平穏に過ごした。

時には新しく言峰教会の管理者となったカレン・オルテンシアや、元魔術師協会の封印指定執行者であるバゼット・フラガ・マクレミ

ツツの2人もその中に加わっていた。

高校を卒業した後は、凜とセイバーと共に魔術の本場イギリスのロンドンにある時計塔に籍を置いた。

そこでも新しい出会いがあった。

凜の永遠の好敵手にして親友となる女性、ルヴィアゼリッタ・エーデルフェイト。

彼女と士郎達4人でいろいろな事件を解決し、様々な研究成果を残し、そしていろいろな問題を起こした。

冬木にいた時以上にスリリングでハチャメチャで楽しく過ごした。

その次の年には桜も冬木の管理をカレンに任せ、ロンドンへとやってきて、さらにそれに拍車が掛かった。

ロンドンへ行つてからは他にもいろいろな出会いがあった。

とある事件でぶつかった代行者の最高機関である埋葬機関第7位シエル、エジプトのアトラス院という錬金術師協会に所属しているシオン・エルナム・アトラシア。

別件の事件で知り合った封印指定を受けた人形魔術師、蒼崎 橙子。橙子が経営する「伽藍の堂」に関わる両義 式、黒桐 幹也、黒桐

鮮花。

彼女たちと出会い、過ごし、共に戦ったのも士郎の良い思い出だ。

——しかし、今、彼女たちはここにはいない。

桜がロンドンにきた1年後。つまり聖杯戦争から3年後、その事件が起きた。

魔術師として魔術の研究に没頭するあまり、魔術師の掟から道を踏み外した者達は少なからずいる。協会からその内のある魔術師の討伐要請が士郎、凜、セイバー、桜、ルヴィアの5人に出された。

凜とルヴィアは協会に貸しを作っておきたいなどの打算で、残りの3人は2人をサポートするためにその要請を受けて現地へと向かった。

しかし、士郎のミスでその魔術師の討伐に梃子摺り、士郎はもちろん凜とルヴィア、そして桜が傷を負った。

特に凜の怪我は酷く意識もなかなか戻らず、治癒魔術を使ったとしても半年はベットから出られないほどだった。

それ以外の3人も凜ほどではないにしろ重症だった。

幸い1週間ほどして凜の意識は戻ったが、士郎はそのことに責任を感じていた。

静養の為、凜をつれて日本に戻ってきた士郎達。それに付き合っ
て日本を訪れたルヴィア。

5人は遠坂邸または衛宮邸で凜の傷が回復するまで過ごした。

そして凜の傷がある程度癒えて歩けるようになった頃、士郎はセイバーや凜達の説得を振り切り、

—— 袂を分かった。

だが、袂を分かったのは何も凜の怪我に責任を感じていたからではない。

かつて橙子に言われた事を思い出したからだ。

『お前と共にいれば彼女たちは傷付くぞ?』

『分かってます。だからずっと側にいるんです。何があっても守れるように』

『馬鹿め、私が言っているのはそういう意味じゃない。お前が側にいると彼女たちはお前に無茶をさせないために負わなくても良い傷を負う。』

—— 本当を守りたいと思うものは遠ざけておくものだぞ』

『……それは……経験からですか?』

『いいや、生き方の選択肢の一つさ』

故に袂を分かったのだ。

その後はかつての切嗣やアーチャーがそうした様に、各地を転々と
して人助けをしてきた。

無論、彼の人助けが普通の人助けであるはずが無い。

あるときは魔術師を相手に、あるときは死徒を相手に、あるときは
人助けとは関係の無い封印指定執行者や代行者とも戦った。

そして士郎は多くの人を救い、守り、時には救えず、守れず、そし
て敵や仕方なかったとはいえ救えないと判断した人たちを殺してき
た。

そして今や、夕日を背景に電車の窓に映るその容姿は、聖杯戦争で
剣を交え、魂をぶつけ合ったアーチャーと呼ばれた赤き弓兵、自身
の理想の成れの果てである『英霊エミヤ』そのものだった。

（ヤツと同じ道は歩まないと誓ったというのにな……）

士郎の胸中にある思いは後悔か、罪悪感か、自身の不甲斐なさを責
める声か、それとも別の何かか。

それは士郎にも解らない。

しかし、これだけは言える。

——後悔はしていない、と。

それをしてしまったら本当にアーチャーと同じになってしまうし、
士郎自身本当に後悔はしていない。

そして士郎はその歩みを止めることは無い。

それは何故か。

かつての士郎ならば救えなかった人たちのことを考えるたびに自分

を責めていただろう。

しかし、今なら知っている。

確かに救えなかった人も大勢いる。

それでも、

——それでも、救えた人たちだっているのだから。

故に士郎は歩き続ける。

それに、今は一人だがアーチャーと違って孤独ではないと彼自身、信じているから。

自分勝手かもしれないとは解ってはいるが、たとえ離れていても『彼女たち』と心では繋がっているのだと思えるから……。

電車を降り、ホームへと降り立つ士郎。

今回士郎は久しぶりに日本の街を訪れた。

しかし、それは過去を懐かしむためでも冬木に戻るためでもない。ある情報屋から抹殺指定の魔術師がこの街に逃げ込んだという情報を掴んだからだ。

その魔術師は根源への道を開くために、非人道的かつ大規模な研究を行っており、魔術師協会からも正式に抹殺指令が出ていた。

以前にも士郎はこの魔術師の討伐を試みたことがあった。

しかし、結局は失敗。

手傷は負わせたものの、逃げられてしまったのだ。

そして今回その行方が判明したので追ってきたというわけだ。

もし、奴が根源へ至ることを諦めていなければ前回と同じ様に多くの犠牲者が出る。

事実、この街では原因不明のガス漏れ事故や行方不明事件などが後を絶たないからだ。

これ以上の被害を防ぐため、士郎は街に着いてすぐにその魔術師の搜索を開始した。

2日後。

結論から言つて士郎は遅すぎた。

士郎が魔術師を見つけたときには、全ての準備が完了していた。街の中心地、ビル街にあるとあるオフィスビル。そこには目を覆いたくなるような光景が広がっていた。

まるで何かの実験場のように青白く光るシリンドーのようなものに浮かぶ人達。

原型を留めている者からそうでない者まで様々だった。

そしてその全ての人が『生きて』いる。

そう、生きているのだ。

五体満足な者も、たとえ手足が無い者でも、脳と脊髄、心臓だけになっっている恐らくは『人』であつたであろう『モノ』まで、例外なく『生きて』いた。

そのシリンドーらしきものと部屋を覆うようにへばり付く肉塊。

その肉塊は脈打ち、時には触手のようなものまで出して蠢いている。床や天井、肉塊に覆われていない壁などには血で奇怪な陣が書き込まれている。

その陣はある術式の起動に必要な呪刻だった。

この部屋、いやオフィスビル全体にそれは施されている。

その術式はこの地の霊脈の上に建っているこのオフィスビルに魔力を集め、根源への扉を開くための術式だった。

そしてシリンドーに収められた人たちはその触媒であり、生贄であつた。

いや、生贄と言うならば街の人間全てが生贄だ。

施された術式は霊脈を通じて街に住む人々の生命力を奪い、魔力に

変換してかき集めるものなのだから。

その術式の基礎となるシリンドーの部屋にたどり着いた士郎は、すぐさま魔術師を排除しようと戦闘を開始した。

しかし、敵も然る者。

一度士郎と戦っていることもあつて対策を十分練つてきていた。加えて戦いを始めた場所が悪かった。

部屋の中にはまだ五体満足で生きている人を入れたシリンドーが複数あり、士郎は思うように攻撃できなかったのだ。

さらに部屋中に張り付いていた肉塊は全てが魔術師の作り出した魔獣の一種であつた。

魔術師はその魔獣から出ている触手を手足のように操り、限定的に術式を起動させて魔力を集め、その魔力を利用して強力な術を放つてくる。

対して士郎は魔術師の攻撃を防ぐためや攻めるため、戦いの余波から生き残った人を守るためにと余計なことに魔力を使っていたため、消耗が激しかった。

激闘の末、漸く士郎の放った剣が魔術師の胸を貫いた。

床へと倒れこみ、その場に自身の血で血溜りを作る魔術師。

魔術師を倒し、歩み寄った士郎は満身創痍だつた。

体中に魔術で負った傷があり、魔力も尽きかけていた。

魔術師が動かないことを確認すると士郎はシリンドーを壊し、五体満足で生きている人を助け出す。

何人かをビルの外へ出し、最後の一人を外へ運び出そうとしてその人を持ち上げようとした時、突如として術式が起動した。

慌てて先ほどまで魔術師が倒れていた方を振り向く士郎。

そこには息も絶え絶えの魔術師が最後の力を振り絞って術式を起動させているところだつた。

「貴様!!」

士郎はその手に双剣を投影し、魔術師を切り捨てる。

「……………貴様……………も……………道……………づれ……………だ……………
……………魔術師……………殺し……………め……………」

その言葉だけを残し、今度こそ死に絶える魔術師。

だが、術式は既に起動してしまっており、とんでもない量の魔力がビルを中心に集まってきている。

そして術式の中心である陣が刻まれた台座の周りには、街中から集まってきた可視できるほど膨大な魔力が渦巻いており、近づくことができない。

（もはやこうなっては術式ごと破壊するしかないな）

そう判断した士郎は最後の一人をビルの外へ運び出すと再び部屋に戻ってきた。

士郎は即座に自分の『世界』からこの状況を打開できるものを検索する。

（……………この少ない魔力で投影できるもの……………コレしかあるまい）

魔力の収束は続いており、集まってきた魔力だけで『孔』が開き始めていた。

かつての聖杯が開けた『孔』に比べれば小さな小さな孔だ。

もし、この『孔』が広がれば、制御されていないので何が起こるか分からない。

ならば開ききる前に術式の起点を破壊する。

「――I am the bone of my sword」
我が
骨子は
捻じれ狂う

自分特有の呪を紡ぎ、その剣を具現化させる。

右手に握られたのは、かつてアーチャーが切り札として使用した剣と同じ、抜れた刀身を持つ剣。

そして今や士郎にとって双剣に次いで投影し慣れた剣。

すでに左手には弓が投影されている。

抜れた剣を弓に番え、引き絞る。

そして剣に現在の全ての魔力を注ぎ込む。

「――偽・螺旋剣」
カラド・ボルグ

真名と共に限界まで引き絞った弓から、歪に捻じれた剣を放つ。

放たれた螺旋剣は魔力の壁を容易く突き破り、一瞬にして台座に到達する。

そして周りの空間ごと台座を破壊した。

台座を破壊したことで術式も破壊され、魔力の流入は止まった。

次第に部屋中を荒れ狂っていた魔力の本流が収まっていく。

そして魔力の本流が収まった部屋にはポツンとピンポン球ほどの『孔』が浮かんでいた。

だがこの『孔』も魔力の供給が止まった今、放って置けば数分も持たずに消えてしまうだろう。

士郎は『孔』が消えるのを確認するまでそこにいることにした。

暫く『孔』を観察していた士郎だったが、暗い『孔』の奥で何かが小さく光ったのが見えた。

（?・・・何だ?）

そつと土郎は『孔』に近づいてその光が何なのか見極めようとした。
しかし、突如としてその光と共に『孔』が広がった。

「何!？」

そして土郎は為す術もなく『孔』から広がった光に飲み込まれた。

序章（後書き）

今まで自分のサイトでのみ掲載していましたが、より多くの方にご意見を頂きたいと思い、1章5節の掲載にあわせてこちらの方にも投稿させていただきました。

ここで頂いたご意見を参考に、可能な限り修正してよりよい作品にしたいと思っています。

ただ、設定や話の流れの都合上、修正できない部分もありますのでその点はご了承ください。

それでは、感想をお待ちしております。

1章1節 邂逅

4月26日

外の世界と結界によって隔たれた封鎖結界内。

そこでは白と黒の2人の幼い魔導師が空中で対峙していた。

彼女達の下、街の大通りでは1匹のフェレットらしき生き物と、オレンジ色の毛色をし、額に赤い宝石のようなものをつけた大型の狼が互いににらみ合っていた。

彼女たちは今も大通りの中心に浮かび、輝き続ける大いなる力を秘めた青い宝石『ジュエルシード』を求めて競い合う者たちであった。その内の白い魔導師——高町　なのはは黒き魔導師——フェイト・テストロッサに話しかける。

彼女がフェイトに問うのはジュエルシードを求める理由。

なのはは自分の戦う理由、ジュエルシードを求める理由をフェイトに話し、その上で彼女の理由を聞きたかった。

なのはにとつて、フェイトはライバルであると同時に放っておけない少女だったのだ。

だから、なのははフェイトのことが知りたかった。

「これが私の理由！」

なのはの話に、彼女の自分に対する態度に思うところがあったのか、フェイトは暫くの沈黙の後に躊躇いを見せつつも話そうとした。

「・・・・・・・・私は・・・・・・・・」

「フェイト！答えなくていい！！」

それをオレンジ色の狼——アルフが遮る。
彼女はフェイトの使い魔であり、同時に今現在フェイトを最も想う者であった。

「優しくしてくれる人たちのところで、ぬくぬく甘ったれて暮らしているようなガキンちゃんになんか、何も教えなくていい！」

「えっ？」

最初、なのははアルフの言っている意味が良くわからなかった。
彼女はそれが普通のことだと考えていたからだ。

だが、かつて自分も一人寂しい経験をしたことがある。
故になんとなく少しだけ分かってしまった。フェイトの寂しげな光を宿した瞳の理由が。

「あたしたちの最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ！」

アルフのその言葉に、一度目を瞑り迷いを払ったフェイトは、再び鎌の形状をしたデバイス『バルディッシュ』を構え直す。

「なのは！」

それを見て取った薄茶色の毛色をしたフェレット——ユーノ・スクライアがなのはに警告を発する。

「大丈夫！」

それをなのはは心配要らない、と彼女の杖型のデバイス『レイジングハート』を構えたまま返す。

暫く睨み合っていた二人だったが、突如としてフェイトがジュエル

シードの方を振り返る。

なのはの一瞬の動揺。

その隙にフェイトは空中をジュエルシードに向かって駆ける。
なのはも慌てて、自身の最速をもってフェイトを追う。

空をジュエルシードに向かって凄まじい速度で降下する2人。
先に出たフェイトに漸くなのはが追いつき、二人同時にデバイスを
ジュエルシードに向かって突き出す。

ガキッ！！

鈍い金属音と共に、2人のデバイスがジュエルシードを挟み込むよ
うにして衝突する。

「うわ」

「え？」

ユーノとアルフのそれは驚きか。

一瞬静止する世界。

その静寂を破るように、なのはとフェイトのデバイスに無数の亀裂
が奔る。

同時に光の柱が立ち上り、次いで光が広がると共に凄まじい衝撃波
が2人と世界を襲った。

「きゃあああー！」

「うつ・・・くうつ・・・！」

2人は為す術もなくその衝撃波で弾き飛ばされる。

「なのは！」

「フェイト！」

コーノとアルフが反射的に2人の名前を呼ぶ。

フェイトは衝撃波で吹き飛ばされたものの、なんとか空中に踏みとどまった。

なのはは咄嗟に勢いを殺し、静かに通りへと着地する。

ジュエルシードを中心に広がっていた光は、再び光の柱となって空を突き上げる。

そして同時に大地が揺れる。

立ってられないほどではないが、強い揺れ。

暫くして激しい光の柱と大地の揺れは次第に収まっていった。

それを確認したフェイトは直ぐにバルディッシュに目をやり状態を確認する。

バルディッシュの状態は酷いものだった。中枢区画である黄色い寶石のような部分まで少しではあるがヒビが入っている。

「大丈夫？ 戻って、バルディッシュ」

『Yes sir』

バルディッシュは黄色い三角形の宝石の様な形をした待機状態に戻り、フェイトの右手の甲に納まった。

それを確認すると、フェイトは目の前に浮かぶジュエルシードを睨み据える。

そのジュエルシードは、まるで心臓のように脈動しているかのようだ。

高度を落とし、地面スレスレで浮かぶフェイト。

彼女は一旦後ろに下がりながら屈伸し、勢いを着けてジュエルシ―

ドへ向かって飛ぶ。

右手を差し出すフェイト。

しかし、そこでジュエルシールドが再び大きく脈打った。

「っ！？」

フェイトは異変を感じ取り急制動を掛ける。

フェイトが制動を掛けるのに一泊遅れて、再びジュエルシールドから光の柱が立ち上る。

だが、今度は衝撃波が発生しない代わりに空中にヒビが入り、白い『孔』が開く。

空間に穿たれたその『孔』は、人一人が余裕で入るような大きさまで広がると、赤い何かを吐き出した。

その赤い何かは道路に放り出され、倒れこむ。

「……っ！？」

その赤い何かの正体を見咎めた4人は驚愕した。

なぜなら、空間に開いた白い『孔』が放り出したのは、赤い外套を見に纏い、全身に傷を負った一人の少年だったのだから。

interlude

白い光を帯びた『孔』に飲み込まれた士郎は、光の空間を漂っていた。

いや、漂っていたというほど生易しいものではなかった。

まるで全身が捻られるような、押しつぶされるような重圧。シェイカーの中で文字通りシェイクされるようにかき乱される体内。奪わ

れていく体力と魔力。

薄れていく身体感覚と意識。まるで存在そのものが希薄になっていくようだった。

だが、その薄れゆく意識の中で、とてつもない不快感や苦痛を感じるものの、士郎の思考は妙にハッキリとして澄み渡っていた。

(・・・さすがにこれはマズイ、か・・・)

そのクリアな思考はいま自分がどんな状態なのか、臆気に理解する。こうなってしまうては死は確実だ、と。

たとえ死にはしなくとも、永遠にこの空間に閉じ込められ、漂うことになるだろう。

今まで自身の死を感じたことは数多くある。しかし、これほど自分の存在が希薄に感じられたことは無い。

(・・・すまないな凜、セイバー。君達の見えていないところで死なないと約束したというのにな・・・)

後悔は無い。未練も無い。

ただ、あるとすればこの入り口である『孔』があつた場所の心配と、凜達との最後の約束まで破ってしまったための罪悪感だった。

(・・・最後までこんな有様か・・・全く俺らしい・・・)

最後に自嘲気味に呟いてみたが声が出ない。そもそもこの空間に音や空気といったものが存在するかも怪しいものだった。

士郎は自分の最後を受け入れようと目を閉じようとした。

もっとも、眼前は白い光一色であり、加えて今の自分に目蓋があるのかすらもう分かりはしないが。

——だが、その中で一筋の光が見えた。

光の中で光を見るというのもおかしい話だが、士郎には確かにその光が見えた。

士郎にとってそれは僅かな希望の光のように感じられた。

(・・・まだ死ねない、ということか・・・)

これが本当に希望の光なのかは分からない。

しかし、賭けてみる価値はがあると士郎は感じた。

(・・・ならば賭けよう。その唯一つの希望に！)

士郎はもはやあるかどうか分からない右手を光に向かって伸ばした。

そして視界にははつきりと、光に向かって伸ばされた自分の右手が映っていた。

i n t e r l u d e o u t

突如として白い『孔』から現れた少年に硬直していたのは達だったが、先ほどまで光を放っていたジュエルシードから光が収まるの感じ、少しだけだが動揺から立ち直る。

そしてジュエルシードの光が収まるのと同時に、空間に開いた『孔』も完全に閉じる。

その場に残ったのは少年と、まるで力を使い果たしたかのように不安定に空中に浮かぶジュエルシードだけだった。

暫く沈黙していた4人だったが、動揺からいち早く立ち直ったアル

フが飛び出し、ジュエルシードを啜えてフェイトの元へ走る。

「アルフ？」

「ジュエルシードは手に入れたんだ。さっさとずらかるう、フェイト」

「うん・・・でも・・・」

アルフの言葉に躊躇いながらも同意を示すフェイトだが、その視線は路上に倒れたまま動かない少年に向けられていた。

「今は気にしたってしょうがないよ。ここにはあいつらだっているんだし、目的のものは手に入れた。さっさと逃げた方がいいよ」

「・・・うん・・・そうだね・・・」

暫くの逡巡の後、フェイトはアルフの言う通りにこの場を離脱することに決めた。

フェイトはジュエルシードをアルフから受け取り、アルフと共に空を飛んでその場を離れた。

だが、離脱中に何度も振り返り、その視線はなのはと道に倒れたままの少年に向けられていた。

フェイトとアルフの姿が見えなくなったのを確認したなのは、急いで道に倒れている少年に駆け寄った。

少年の歳は一見したところなのはよりも若干上、恐らくは12・3歳前後。

髪は色の抜けた白髪で、肌は褐色。服装は黒いボディーアーマーとパンツ、その上から赤いジャケットのようなものを着て、マントの

ようなものの腰に着けている。ぱつと見バリアジャケットに見えないことも無い。

だが、その服は全て少年よりも大きく、ブカブカだった。

「……酷い傷……」

なのはなそんな少年の容姿よりも、彼の負っている傷の方が気になっていた。

全身傷だらけで、赤いジャケットも黒いボディーアーマーもボロボロだった。

傷はかすり傷程度のものから、鋭利な刃物で傷つけられたようなものまで様々だ。

「ユーノ君、治せる？」

「待つて……確かに酷い傷だ。……治せないことはないけど、僕の治癒魔法でも完全に治すのは無理だと思う」

そう言いながらユーノは少年に治癒魔法をかける。

少しずつではあるが少年の傷が塞がっていく。

だが、全ての傷が完全に塞がったわけではない。

「……今の僕にはコレが限界かな。……本当は病院に運んだ方がいいんだろうけど、状況が状況だし、取り敢えずなのは家に運ぼう」

「うん、わかった」

そう言ってなのはは少年の脇に腕を入れ、肩を貸すようにして持ち上げる。が。

「お、重い」

いくら少年とはいえ身長はなのはより高いし、人間というものは意識が無く力が抜けているとそれだけで重たい。なにより小学生の女の子が年上の男の子を持ち上げられるはずもなく、半ば引きずるようにして進む。

仕方なくユーノが魔法で少年の身体を若干浮かし、軽くなったのをなのはが家まで運んでいった。

無論、軽くなったからと言って重さがなくなるわけではない。

家までの道中はなのはにとって、今まで経験したことのない程の重労働だったのは言うまでもない。

家に着いてからも大変だった。

傷だらけの少年を、家族に見つからないように部屋に運び込まないといけなかったからだ。

家族に言っ手伝ってもらっても良かったのだが、それではこんな時間に外で何をしていたのかとか、この少年は誰なのか、とかいろいろ説明しなくてはならなくなる。

それに魔法が関わっているのだから、そもそも説明できるはずがない。

仕方なくユーノの魔法で誤魔化しつつ、なんとか少年をなのはの部屋に運び込み、ベッドに寝かせることができた。

今少年が着ている服はなのはの兄、恭也のお古だ。

流石にあのボロボロの外套とボディーアーマーは血だらけで、そのままベッドに寝かせるわけにはいかなかったのだ。脱がせた外套とボディーアーマーはビニール袋に入れて、なのはの部屋の押入れに入れてある。

その服を着せ替える時に、なのはとユーノは驚いていた。

少年の身体にはまだ治りきっていない新しい傷以外に、古い傷痕が数え切れないほどあったのだから。

少年をベッドに寝かせた後、なのはは夜食を取りに下へ降りていった。

その間、ユーノは破損したレイジングハートの方は自己修復機能をフル稼働させ、傷を負った少年にはこまめに治癒魔法をかけていた。暫くしてなのはが戻ってくる。

「ユーノ君、どう？」

「この子のことなら大丈夫。さつき何度か治癒魔法をかけたから、粗方傷は塞がってるよ。体力をかなり消耗してるらしくてまだ気が付いてないけど、たぶんもう心配は要らないと思うよ」

「そう、よかった」

ユーノの言葉に安心したのだろう。なのはは肩の力を抜いて安堵の溜息を漏らした。

「レイジングハートの方はかなり破損は大きいけど、こっちもきつと大丈夫。今、自動修復機能をフル稼働させてるから、明日には回復すると思う」

「うん・・・」

少年のときと比べ、その表情は沈んでいた。それを感じたユーノはなのはを気遣って声をかける。

「なのはは大丈夫？」

「うん・・・レイジングハートが守ってくれたから・・・」

だが、それは余計になのは気分を沈めさせるだけだった。
なのははレイジングハートを見ながらポツリと言った。

「ごめんね、レイジングハート」

「・・・うつ・・・」

「「!!」」

その時、ベッドの方から呻き声が聞こえた。

2人は慌ててベッドの方を振り返り、ベッドに近寄る。

なのはが近づくと少年の目が弱々しくではあるが開かれようとしていた。

「よかった、気がついた・・・」

なのはは少年が目を覚ましたことで安堵の声を漏らす。

ユーノも安堵の溜息をついた。

少年はまだ意識がはつきりしないのか、状況が把握できていないのかは分からないが、辺りを見回していた。

「・・・ここは・・・どこだ・・・?」

「私の部屋だよ。君、道に倒れてたの」

自分の声に応える声があるとは思っていなかったのか、少年は驚いたようだった。

「……ここはどこだ？」

今度ははっきりとした声で少年はなのはに質問した。

ユーノがなのはの先ほどの答えよりも詳細に説明する。

「ここは海鳴市という街です。あたなは街中で倒れていて、それを僕達がここに運びました」

まさかフェレットもどきが喋るとは思わなかったのか、再び少年の顔に驚きが浮かぶ。

だが、直ぐに動揺から立ち直ると少年は身体を起こそうとした。それをなのはが慌てて押さえ込む。

「だめだよっ、まだ寝てないと！今は塞がってるけど、酷い怪我してたんだから！」

少年は暫くなのはの目をジッと見ていたが、観念したのか、それとも起き上がるだけの体力がまだ回復していないのか、再びベッドに身体を横たえた。

「……傷の治療を？」

「はい、僕がやりました」

「……君は使い魔なのか？」

使い魔という言葉になのはは驚きを、ユーノはやはり、というような顔をした。

「正確には違います。僕の名前はユーノ・スクライア。それでこっちが」

「高町なのは、なのはでいいよ。あなたのお名前は？」

「……衛宮、士郎」

ユーノは少年——士郎の質問に名乗り返すことで答え、なのはも自己紹介をする。

士郎の自己紹介が終わると、ユーノが少年に尋ねる。

「それじゃ衛宮さん、お聞きますがあなたは魔導師ですか？」

「……魔導師？」

「違うんですか？」

士郎は魔導師という言葉を訝しんだ。

彼からしてみれば『魔術師』という言葉が出てくると予想していたのに、出てきた単語は『魔導師』だ。

そしてよくよく考えてみれば、士郎は自分が今どのような状態なのか、どのような状況に置かれているのかも把握できていない。

サツと自分の状態を解析してみる。

身体に傷は負っているもの、当初士郎が負っていた傷よりも大分良くなっている。体力・魔力共に底をついているが身体に異常はない。強いて言うならば身体が縮んでいることか。

続いて感覚を研ぎ澄まし、辺りを探ってみる。

しかし、探ってみてわかったのはこの周辺には異常はないということ。結界すらも張られていない。

目の前の少女、なのはから異常とも言えるほどの膨大な魔力を感じ

ている所為で、詳細には辺りを探れないが。

そこから士郎は目の前のなのはとフェレットの姿をしたユーノが、魔術師に近い存在ではあるが、魔術師とは異なる存在、ユーノの言葉信じるなら魔導師と呼ばれるものなのだろうと結論付けた。

（・・・まずは状況確認が最優先、か・・・）

そう判断すると、状況を少しは知っていそうな目の前の2人（？）に状況を聞いてみることにした。

「・・・似たようなものだ。だが、こちらとしても混乱していて状況が把握できていない。すまないが今の状況が知りたい。詳しく話してもらえないかね？」

「わかりました。僕からお話します」

そう断ってからユーノは説明を始めた。

まず、士郎が出てきたときの状況。そしてそこへ至るまでの過程。ジューエルシードがどういったものなのかや、それを探す理由なども全て話す。

もちろんユーノとなのはとの出会いも。

士郎が魔導師のことを聞いてきたときは、魔導師はどういったものなのか、また使う魔法はどんなものなのかも丁寧に説明した。

魔法については実際に簡単なものを見せたりもした。

それを見て聞いた士郎の結論は、この世界は『平行世界』だということだった。

（そんなバカな・・・ここは『平行世界』だというのか！？
そんな筈は・・・いや、冷静になれ衛宮士郎！ 落ち着いてよく考えてみる・・・）

士郎は咄嗟に浮かんだ『平行世界』という結論を頭を振って否定したが、やはりよく考えてみると、もうそれしか思い浮かばなかった。

（よく考えればよく考えるほど・・・魔法と呼ばれるものからして、ここは俺の知っている『世界』ではないとしか思えない・・・魔法と呼ばれるものの方向性や威力、システム、術式、全てが魔術とは異なっている。それに魔力の発生器官も魔術回路ではなく、リンカーコアと呼ばれるものと言うしな・・・。そもそも俺の知っている限り、日本に「海鳴市」という街は存在しない。・・・そうなるとう冬木という街や魔術が存在しない可能性もある。魔術が存在しないのであれば魔術師も存在しない。それに・・・）

そう考えて士郎はなのはをチラリと見た。

その視線を受けたなのはは不思議そうにしている。

（このような異常な魔力を持つ者が突発的に発生するなど考えにくい。・・・可能性の上ではいたとしても不思議ではないが、今のうちに平穩に暮らせることは、俺の知る『世界』では可能性は極端に低い）

そう、士郎がいた元の世界ではこれほどの資質を突発的に得た者の末路は大抵決まっている。

魔術師協会に無理やりにも魔術師として仕立て上げられるか、どこかの魔術師が自分の系譜か血筋に組み込もうとするか・・・。それだけならばまだマシな方である。酷いものでは実験台や生贄にされたり、邪悪なものを無意識に引き寄せて、周りの者共々不幸に見舞われる者もいる。

（加えて、魔術師が存在したと仮定しても、結界を張っていたとい

え、そこまで大規模な魔力の反応を魔術師や魔術師協会が見落とすとは考えられんな……。だとすれば、やはり『平行世界』以外にありえないか……………」

士郎は今度は視線を窓の外へと向けた。

（それならば先ほどから感じていた、この異常なほどの大源の濃度^{マナ}にも説明がつかない。たとえ極上の霊地であつたとしても、大源の濃度がこれほど高いのは通常あり得ん。それはつまり、大源を汲み上げる者がいない、あるいは極端に少ないからだろ。……………本当に困った。）

落ち着きを取り戻した——とはいってもそうそう納得はできないが……………——士郎は視線をユーノとなのはに戻した。

幾つか彼女達に確認しておきたいことができたからだ。

「大筋においては理解した。次元世界というのが良く解らんがな。……………ユーノ・スクライア、君は次元空間というものを超えてここにいる魔導師なのだろう？その魔導師の組織は存在するのか？」

「はい。次元世界を管理する時空管理局という組織が、それに該当すると思います。ただ、魔導師だけの組織というわけではなくて、魔導師ではない人もたくさん勤務してます。……………それと僕のことにはユーノでいいですよ」

「そうか」

管理局という言葉と、ユーノが「勤務」という言葉を使ったということは、一種の管理機関のようなものだろうと士郎は結論付けた。それも魔術師協会のように裏の組織ではなく、公の会社や行政機関

のようなものだろう、と。

「もう2つほど構わんか？」

「はい、なんですか？」

「その時空管理局が管理している世界についてなのだが、この世界も管理されているのか？」

「いえ。この世界は管理外の世界なので、97番管理外世界という番号で識別されています」

「そうか。ではもう一つ。その管理を受けるに当たって、何か基準のようなものはあるのかね？」

「基本的には魔導文明を持つ世界に限定されています。ただ、例外も幾つかあるのではつきりとしたことは言えないんですけど」

ユーノの答えを聞いて、土郎はこの世界にほぼ魔術師が存在しないと考えていた。

もし本当にそうなら、『ここ』が『平行世界』であることはほぼ間違いない。

(・・・・・・・・・・なんですか・・・・・・・・・・)

そうやって自分の思考に没頭して、溜息を吐きつつ、嘗ての口癖を心の中で洩らしていた土郎に、今度はユーノから質問が投げかけられる。

「それで衛宮さん」

「ん？何かね？」

「あなたはどうしてあんなに傷だらけで、あの『孔』から出てきたんですか？それに魔導師と似たようなものって・・・」

士郎は考えた。ここで全てを話してしまっているのかと。

その時空管理局や魔導師たちが、今士郎の考えているようなものであれば大した問題はないだろうが、もし万が一自分の使う魔術や平行世界のことを知られてしまうと、後々厄介な事態になるかもしれない。

そう考えると、ここでは迂闊に喋ってしまうわけにはいかなかった。士郎はある程度真実と嘘を織り交ぜて、肝心な部分は適当に誤魔化してしまうことにした。

「ああ・・・まず私が魔導師のようなものと言ったのは、私も魔力を使った術を使うからだ。ただ、あくまで感覚的なもので、魔導師のように術式を組んだりはしないのでな。だから似たようなものだと言ったのだ。そして私がなぜその『孔』から出てきたかだが・・・正直私にも解らん。どこかの街で誰かと戦っていたのは覚えているのだが、記憶に混乱が見られ、非常に曖昧だ」

「そうですか・・・」

ユーノは何かを考えるようにして俯いてしまった。

士郎は魔術に関しては多少嘘を吐いたし、『孔』に飲み込まれる前のことはばかしたが、『孔』のことに関しては本当だった。

現状、自分がどういう理屈でここにいるのか、士郎は本当にわからなかった。

そしてユーノと入れ替わりに、今度はなのはが士郎に質問してきた。

その態度は興味津々といった風だ。

「ねえ、衛宮君が言ってた術ってどんなものなの？」

「そうだな……ユーノ、魔法に物を転送できるものはあるか？」

「え？はい、ありますよ」

「ふむ、私もそれと似たようなことができる。ただし、極限定的なもので、私が所有している『蔵』のような場所から、そこに入れたものを持ってきたり戻したりすることだけが」

「へー。どんなの？見せてくれる？」

士郎は少しここで見せてもいいか迷ったが、いずれは見せることになるだろうと思い、見せることにした。

それにこの世界に魔術の基盤が存在すのかも確認しておきたかったのだ。

だが、今は魔力が底を突いているので見せることができないことを思い出した。

「……すまん。今は魔力が底を突いているので見せることができません」

「そうか」

なのはは士郎の言葉を聞いて少し残念そうだ。

「魔力が戻ったら見せてやろう」

そう士郎が言うと、今度は周りで花が咲き誇りそうなほどの笑顔を見せる。

（裏表なく、感情表現が豊かな子だ）

それが士郎のなのはへの印象だった。

その後は暫く今後どうするかという話になったのだが、士郎はここでなのは達への協力を申し出た。

最初は驚いていた2人だったが、今日助けてもらったお礼と、一宿一飯の恩があるからと言うと2人は士郎の申し出を渋々だったが受けてくれた。

もつとも、士郎としては借りがあるだけではなく、この子達と一緒にいれば色々なことが解るかもしれないという打算があつてのことだった。

それにジュエルシードと呼ばれるトラブルの種を放っておくことが、士郎にはできなかった。

その日は夜も更けてきたので、それでお開きとなった。

ユーノの話では明日の夕方には歩けるようになるだろうということだったので、士郎は今日と明日はしっかりと休むことにした。

士郎はそのままなのはのベッドを借りて眠り、なのはは押入れから予備の布団を出してそこで眠った。

こうして物語は本来の道筋を外れ、新たな物語を紡いでいくのだった。

1章2節 介入

4月27日 高町家

まだ日が昇ったばかりの早朝。

いつも寝ぼすけのなにはにしては珍しく、その日は早くに目が覚めていた。

そして彼女は今、自宅の道場にいる。

目の前ではなのはの姉、美由希が小太刀の木刀を振るっている。

だが、なのはの目にはそれは映っていない。

彼女が想うのはあの悲しそうな赤い瞳をした少女、フェイトのことであった。

《なのは？》

《っ、ユーノ君？》

突然の念話で少し驚いたなのは。
相手はユーノだった。

《どうしたの？こんなに朝早く》

《うん・・・ちょっと目が覚めちゃったから・・・。それでねユーノ君、私考えたんだけど》

《うん？》

《私、やっぱりあの子の事、フェイトちゃんのことを気になるの》

なのはの頭からはフェイトの悲しそうで優しさを内包した瞳が離れなかった。

それが嘗ての自分の境遇と重なってしまうのかもしれない。

だからこそ、なのはにはフェイトを放っておくことなどできなかったのだ。

《気になる？》

《凄く強くて、冷たい感じもするのに、だけど綺麗で優しい目をしてて……。なのに、なんだか凄く悲しそうな……》

《うん……》

《きつと理由があると思うんだ。ジュエルシードを集めている理由だから私、あの子と話したい。だから、そのために……》

美由希が大きく踏み込み、虚空を薙ぐ。なのはの頬を、微かな空気の流れが撫でる。

その姿を見て、なのはは何かを見出したようであつた……。

美由希に舞の如き鍛錬を見せてもらった礼を言つて、なのは道場を出た。

家へ戻る途中、なのはは再び念話でユーのに話しかけた。

《……それにね。あの子の事も気になるの》

《衛宮さんのこと？》

そう。なのはにはもう一人、放っておけない気なる人物が加わつた。傷だらけで目の前に現れたことも気になる要因の一つだが、なのはは士郎にフェイトと同じ匂いを感じ取っていた。

だが、士郎の抱えているものはフェイトのそれよりも大きく、どうしようの無いものにも感じられた。

《うん……。昨日、衛宮君をベッドに押さえ付けた時に見たの。フェイトちゃんと一緒に、少し寂しそうな目をしてた……。でも、フェイトちゃんよりも暗くて深くて、それでいて吸い込まれそうに澄んだ目。力強くて何にも負けないような目。だから、衛宮君のことも気になるんだ。……。なんだか放って置けなくて》

《うん。分かった》

そう返したユーノの視線の先には、体力と魔力の消費の所為か、まだなのはベッドで死んだように眠っている士郎の姿があった。

ユーノも士郎の事が気になっていた。

士郎からは見た目の年齢にそぐわない貫禄や存在感を感じていたのだ。

ユーノが自分やなのはより少し年上とはいえ、妙に畏まって敬語を使っているのもその理由の一つといえる。

加えて、彼の全身に負っている古傷だ。

士郎が負っていた傷だけでなく、身体中に残っている傷痕はどう考えても相当前にできたものであり、数も大きさも、傷の位置などから予想されるダメージも半端ではないのだ。

いったいどうすればこのような傷ができるのか、ユーノは気になって仕方がなかった。

なのはは道場から戻ってきて朝食を食べた後、ユーノと一緒にこっそりと家族に内緒でパンを焼いて部屋に持ち込んだ。もちろん士郎の朝食である。

部屋に入る前にノックをする。

「衛宮君、起きてる？」

自分の部屋に入るのにノックをするとは奇妙な光景だが、中には別の人がいるのだから仕方がないだろう。

「・・・なのはか？大丈夫だ、もう起きている」

中から士郎の返事が返ってくる。

それを確認して2人は「失礼します」と言って中へ入った。

「・・・自分の部屋だろう。私がいるからといって気を遣う必要はない」

「にはやは、そうだね。でも、やっぱりお客さんがいるから」

そう言っただけなのは勉強机用の椅子をベッドの前まで持ってきて座る。ユーノはなのはの肩の上だ。

そして士郎に皿に載せたパンを差し出す。

「もう体は大丈夫？パンだけど、食べられる？」

「大丈夫だ。ユーノの治癒魔法と君の看病のおかげで、傷の方は粗方回復している」

士郎は身体を起こし、なのはが差し出したパンを受け取って食べ始める。

その姿は、つい昨晚大怪我を負っていた者とは思えないほどの食いつぶりだった。

それを見てなのはとユーノは安堵した。

士郎がパンを食べ終わり、食後の牛乳を受け取って飲む。
一息ついたところで士郎が話を切り出した。

「それで、今日はどうするつもりだ？」

「うん、取り敢えずは普通に学校かな。レイジングハートのこともあるし、ジュエルシードを探すのは夕方か明日になるかな」

単なる魔法の使用だけならば、今のものはならデバイスなしである程度は魔法を行使できる。

しかし、ジュエルシードの封印にはそれなりの出力とそれを制御する必要がある。

そうなると流石にデバイスなしでは封印できないのだ。

「そうだね。レイジングハートも大分直ってきてるみたいだし、夕方方には修復は終わると思う」

「そうか。・・・それでは私はそれまで回復に専念させてもらうこととしよう。魔力は殆ど戻ったが、まだ体力が回復しきっていない。もうしばらく掛かりそうだ」

士郎の魔力はこの異常なほどの大源の所為かユーノの治癒魔法の所為かは分からないが、殆ど回復していた。

体力の方も粗方回復しているが、それは日常行動に支障をきたさない程度のものだ。

今の状態では戦闘行動は不可能とは言わないが、かなり制限を受けることになるだろう。

「うん、わかった。それじゃあ取り敢えずは夕方からだね」

「承知した」

話し合いを終え、なのはは学校へ行く準備をする。
そこでふと、思いついたように言った。

「そついえば衛宮君は念話使えるの？使えるなら学校行ってる間も色々お話聞きたいんだけど」

「念話？」

「はい、俗に言うテレパシーとかと似たようなものです。相手のことを思い浮かべるだけで、離れていても会話ができるんですよ」

「・・・生憎だが、私にはそのような器用なことはできんな」

「器用？けっこう簡単だよ？」

部屋に一瞬の沈黙が下りる。

ただでさえ仏頂面のような顔をしている士郎が、余計に顔を顰めてしまった。

「・・・君達の基準で言わないでくれないか？私は才能といったものには無縁なのだ。それに、魔法に関して私は初心者なので・・・」

「

「それじゃあレイジングハートが直ったら、少し練習してみますよ
うか？そうすれば直ぐにデバイスなしで使えるようになりますよ」

「・・・そうか。ではそうさせてもらおう」

一応の方針が決定し、なのはは学校へ。士郎とユーノはお留守番をしつつ回復と念話の練習に集中することとなった。

interlude

同時刻 次元空間内

青や紫、それに黒などがオーロラのように混ざり揺らめく空間、次元空間。

その亜空間の中を、SF映画にでも出てくるような白い戦艦が進んでいた。

戦艦の名は『アースラ』。時空管理局の次元航行艦である。

そのアースラのブリッジには、今4人の人間がいた。

2人はおそらくアースラの管制官だろう。

1人は戦闘服のようなものを着て管制官の1人と話をしている。もう1人は艦長席に近づく、緑色の艶やかな髪をポニーテールにした女性であった。

「皆、どーお？今回の旅は順調？」

「はい。現在第三戦速にて航行中です。目標次元には、今からおよそ160ヘクサ後に到着の予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きは無いようですが、二組の搜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね」

2人の報告を聞きながら、この次元航行艦アースラの艦長——リン

ディ・ハラオウンは艦長席に腰を下した。

「そう」

「失礼します。リンディ艦長」

リンディが席に座ったのを見計らって、茶髪を短くカットした女性——エイミー・リミエッタが紅茶を入れたカップを持ってきた。それを艦長席に座ったリンディの前に置く。

・・・お世辞にも置き方が丁寧だとはいえないが・・・。

「ん。ありがとね、エイミー」

リンディは満足そうに礼を言つと、エイミーが運んできた紅茶を一口含みながら言う。

「そうね。小規模とはいえ、次元震の発生はちよつと厄介なものね。・・・それに報告では、現場で極々小さいものではあるけどワームホールも確認したということだし・・・危なくなったら急いで現場に向かつてもらわないと。ね、クロノ」

リンディはブリッジにいる黒い戦闘服を着た少年、時空管理局の執務官であり、彼女の実の息子——クロノ・ハラオウンに話を振った。クロノはリンディの方を振り返りながら、それに応える。

「大丈夫、分かってますよ艦長」

クロノは金色のカードのようなものを取り出しながら言った。

「僕はその為にいるんですから」

その顔には笑みが浮かび、自信に満ち溢れていた。

i n t e r l u d e o u t

夕方の海鳴市。

聖祥大付属小学校の送迎バスが、夕日で赤く染まった町中で止まる。学校からバスで帰ってきたなのはバスを見送り、おずおずと歩き出す。

そのなのは進行方向の電柱の影に、黒い服に身を包んだ士郎が立っていた。その肩には、レイジングハートを首から下げたユーノが乗っている。

「なのは」

ユーノが士郎の肩からなのはの肩に移り、レイジングハートを渡す。それを手に乗せてなのはは安心したように言った。

「レイジングハート直ったんだね。よかった」

『C o n d i t i o n G r e e n .』

「また、一緒にがんばってくれる？」

『A l l r i g h t . M y m a s t e r .』

なのはの言葉に答えるようにレイジングハートが返す。それを聞いてなのはがレイジングハートを大事そうに胸に引き寄せ

た。

「ありがとう・・・」

なのはは今度は視線を上げ、目の前に立つ士郎を見る。

「衛宮君も、治ってよかった」

「ああ、お蔭様でな。まだ本調子とはいいがたいが、魔力も体力もほぼ回復した。問題ない」

士郎はそう言つて、相変わらずの無然とした表情で言つた。
なのははそんなことを気にした風でもなく、士郎に話しかける。

「ねえ、魔力が戻つたつてことは、昨日言つてた衛宮君の魔法、見せてくれるの？」

「ああ。だが、ここで直にというわけにはいかな。どうせまた戦うことになるのだろう？その時にでもご披露しよう」

そう言つて士郎は口を吊り上げ、人の悪い笑みを浮かべる。

なのはは士郎の言い分に不満そうに頬つぺたを膨らませてブーブー言っている。

その姿は、どこか仲の良い兄弟といった感じだった。

その後、3人は揃つてジュエルシードの探索を開始した。

その道中いろいろな話をした。

今日の朝の一件、念話の話などだ。

あれから士郎はユーノに付ききりで念話を教えてもらっていた。最初は士郎の予想通り、なかなか上手くないかず、かなり苦労したようだ。

昼過ぎにはある程度レイジングハートが回復しており、レイジングハートの力を借りて念話の訓練を続行した。そのおかげで、驚くほど才能が無かった士郎にでも、ある程度念話が使えるようになっていた。

もつとも、まだなのはやユーノのように長距離の会話はできず、距離が離れると受信しできなくなる。ユーノからはまだまだ訓練の余地があるといわれた。

士郎としては、才能が無いといいつつも、魔術にあれだけ才能が無かったのだからひよつとしたら魔法なら、という僅かな希望を抱いていたのだが、それが木っ端微塵に打ち砕かれた。

彼はとことん「へっぽこ」であるようだ。

他には士郎の名前の呼び方などの話しも出た。士郎はなのはとユーノを名前で呼んでいるのに、士郎だけ名字というのはダメだとなのはが言い始めたからだ。

その話の結果、士郎はユーノには呼び捨てで、なのはには「士郎君」と呼ばれることになった。

加えて、当初こそ士郎から滲み出す貫禄の所為で敬語で話していたユーノだったが、このときから敬語が取れ、タメ口になっていた。そうして話をしながらジュエルシードの搜索を行っていた3人だったが、臨海公園の方向からジュエルシードの魔力を感じたため、即座に臨海公園へと急行した。

士郎達が到着した時には、すでにジュエルシードを取り込んだ木が巨大化し、意思を持って動き始めているところだった。即座にユーノが結界を張る。

「封時結界、展開！」

ユーノの結界で外の世界と隔絶される空間。

しかし、その結界を見た士郎の感想は「雑すぎる」の一言だった。今では凜やルヴィア、果ては大師父からの仕込みなどもあって、士郎はそれなりに魔術を使えるようになっていた。その士郎から見てみれば、ユーノの張った結界は規模が大きく、周辺の空間から瞬時に隔絶されることは見事だが、『秘匿』という面からいうと最悪のものだった。

確かに一般人にはそれとは判別できないだろうが、魔術師や魔導師、それにたとえ民間人でも少し強めの魔力を持つものならば察知できてしまうものだった。

士郎の世界の常識ではあり得ないほど酷い。

もつとも、嘗ての士郎が張った結界ほどではなかったが……。

(……とはいえ、これほどの大規模な結界、俺に張ることは不可能だな)

士郎は結界についての考えをそこで打ち切り、今度は木の化け物と白いバリアジャケットに身を包んだのはを見た。その手にはデバイスモードとなったレイジングハートが握られている。

(……典型的な『魔法少女』だな。……それになんだ？あの木の化け物は。まるで『絵』に描いたようにありきたりだな。……凜のあのふざけた魔法少女姿を何度か見て、耐性は付いている筈なのだが……。頭痛がしてくる……)

士郎は頭痛のする頭に手をやって、数回頭を振りながら現実逃避を試みたが、目の前の光景は変わらなかった。

その時、金色の光の矢のようなものが飛来し、木へと襲い掛かる。木はそれを障壁のようなもので防いだ。

士郎は光の飛来した方角を振り返る。

そこには黒い死神のような格好をした、金髪をツインテールで纏めた少女とオレンジ色の獣がいた。

（……あれがなのはの言っていたフェイト・テストロツサと使い魔のアルフか。この世界の使い魔は人型になれば、話すことができると思うが……。それにあの少女の持つデバイスと呼ばれるもの。なのはのレイジングハートとはかなり形状が異なるな。レイジングハートと同様に機械的ではあるが。やはり科学、技術を重視しているということか）

士郎はフェイトとアルフの会話を聞くために、そしてこの世界で魔術が使えるかどうかの確認も含めて試しに聴力を強化してみた。

「うつお、生意気にバリアまで張るのかい」

「うん。今までのより強いね。それに……。あの子もいる……。それと昨日の『孔』から出てきた子も……」

すると問題なく二人の声を聞き取れた。

どうやらこの世界でも魔術は有効であるようだった。

それに気のせいかもしれないが、強化の魔術が効き過ぎているように士郎には感じられた。

周りの草が擦れ合う音や、木の化け物が暴れる音がやけにうるさく感じたのだ。

（……俺以外の魔術師がいないために、神秘の独占という点で魔術の効果が上昇しているのか？……この戦闘で少し確認してみるか……）

士郎は木へと視線を戻す。

ちょうどその時、木が自分の異常に太い根が地面を割って飛び出してきたところだった。

それを危険と判断したのか、なのはがユーノと士郎に避難を促す。

「ユーノ君、士郎君！逃げて！」

それを聞いてユーノが草むらへと走り込み、退避する。

士郎も様子を見るために一旦距離をとった。

木の根はさらに大地を割り、その姿を現す。そして、それをそのままなのはに叩きつけようとする。

『Flier fin』

レイジングハートがなのはのブーツに桜色の羽を生やし、空へと押し上げる。

そして木の根が先ほどまでなのはがいたところに叩きつけられ、地面を抉り粉塵が立ち上る。

「飛んでレイジングハート！もっと高く！」

『All right.』

なのはの意思に答え、レイジングハートが桜色の羽を巨大化させて更に高い位置へと舞い上がらせる。

士郎はその姿を見て、またまた呆れ返っていた。

「魔法少女は空を飛ぶもの」と凜がゼルレッチの宝箱内に封印していた、彼の馬鹿ステッキは言っていた。だが、よもやそれを目の前で目撃するとは思わなかった。

士郎が人が空を飛ぶのを見たことがあるとすれば、聖杯戦争で自分

とアーチャーを追い詰めたキャスターくらいのものだった。
なのはそのまま戦闘体勢に移行する。

レイジングハートをデバースモードからシューティングモードへ移行し、狙いをつける。

その頃、フェイトも戦闘体勢に入っていた。

「アークセイバー。いくよ、バルディッシュ！」

『Arc Saber』

バルディッシュの先端に鎌上の黄色く発行する刃が形成される。

フェイトはそのまま大きく踏み込み、刃を飛ばす。放たれた刃は木の根を切り裂き、本体へと迫る。だが、刃が本体に直撃すると思われた直前にバリアで防がれる。

今度はなのはが上空からデバースバスターを放つが、これもバリアで防がれてしまう。

先ほどの攻撃を防がれたフェイトは、なのはの砲撃にあわせるようにしてサンダースマッシャーを放つがこれも防がれる。

木の化け物が苦しそうに蠢いているのでそれなりに効いてはいるのだろうが、依然としてバリアが破れる様子はない。

「そんな・・・」

「くっ・・・硬い・・・」

二人は砲撃を放ち続けているが、木のバリアは更にその上に行く。

（・・・・・・そろそろ加勢するか・・・・・・）

状況を不利と判断した士郎は、全身に強化の魔術をかけ、両手に黒

鍵をそれぞれ3本ずつ投影する。

投影は問題なく成功した。むしろ投影時にかかる魔力消費量は若干であるが減少し、速度は向上している。

投影した黒鍵の右手の方には結界破壊の効果を付与し、左手に持つ方方には火の属性火葬式典の効果を付与してある。

そして右手に持った結界破壊を付与した黒鍵を、埋葬機関第七位「弓のシエル」直伝の鉄甲作用と呼ばれる投擲法で、大木の上方を搗ち上げるように投げ放つ。

「ぐっ?!」

だが、そこで士郎が感じたのは全身に、特に腕に奔った激痛。その激痛に顔を顰めつつ、士郎は自身の攻撃の結果を見届ける。

放たれた黒鍵は、本当に人間の手で投擲されたのかと疑いたくなる速度で、木の張るバリアへと吸い込まれていった。

直後、大気を揺るがす轟音と共に巨大な木の化け物が軽く仰け反り、バリアが粉々に破壊される。

「……なっ!?!」「……」

その驚きは士郎以外のここにいる全員のもの。

なのは達にしてみれば、砲撃でも貫けないバリアが、まさかあのような奇妙な形をした剣に破壊されたばかりか、投擲されただけのはずの剣が木を仰け反らせるような威力を持っているなどと思っても寄らなかったのだ。

士郎としても少々驚きがあった。

子供の身体になってしまった所為で筋力と反応速度が低下している。加えて自分の認識と身体のリーチなどに違和感があり、その所為で本来（大人の時に）は出せるはずの威力を出し切れなかった……はずだった。

しかし、予想に反して強化の魔術が強く作用し、タイミングや黒鍵の進入角度がぴったり合っていたことを考えても、思っていたよりも大きな威力が出た。

そこで士郎は思い至る。

先程の激痛は、強化の魔術が過剰に作用したその反動だったのだと今のどのように魔術の効果上昇しているか分からない段階で下手に強化を使用しすぎると、後にくる反動が気になる。下手をすれば、2度と身体が使い物にならなくなるかもしれないのだ。そのため、士郎は今後肉体強化を使用する際は、様子を見ながら使用することにした。

士郎は強化の魔術を若干絞り、強化された筋力を調整したうえで、なのは達の動揺を他所に左手の黒鍵を放つ。

「火葬式典！」

今度はバリアの障害を受けずに本体へと突き刺さった黒鍵から、まるで爆発するように物凄い炎が噴出し、木を炎で包み込んでしまう。木は熱と体を焼く火そのものから逃れようともがき苦しむ。

やがてその強烈な炎の中で木は動きを止め唯の灰と化し、炎が消えると空中にはジュエルシードのみが残された。

5人はその光景を呆然と見ていた。

黒鍵を放った士郎もだ。

火葬式典の効果はよく知っているが、自分が放つ火葬式典の威力は、間違っても短時間で大木を灰に変えてしまうような火力はなかったはずなのだ。

先程の強化の魔術の件で、ある程度は威力は上がるだろうと予想していたが、その予想を遙に上回る威力だった。

もし、今の攻撃で火葬式典ではなく、橙子直伝の火のルーンアンサスを使っていれば、それこそ大事になっていたかもしれない。

「今後魔術を使う時は本当に、ほんとに気を付けよう」と思う士

郎だった。

士郎は魔術に関する思考を一旦打ち切り、取り敢えず驚きで動いていない4人に声をかける。

「何を呆けている！さっさと封印したまえ」

なのは達はその士郎の声で我に帰り、なのはとフェイトの両名がそれぞれのデバイスを封印形態へ移行し、封印を開始する。

眩い光の後、一応の封印を施されたジュエルシードが空中で静止している。

だが、なのはとフェイトはそれを放ったまま、互いにデバイスを構え睨み合っている。

「ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたいだ」

「うん・・・タベみたいな事になったら、私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュも、可哀想だもんね・・・」

「・・・だけど、譲れないから」

そう言うとフェイトはバルディッシュをデバイスフォームへと戻し、なのはに向かつて構え直す。

どうやらまたここでやり合うようだ。

「私はフェイトちゃんと話しをしたいだけなんだけど・・・」

それを見てなのはは少し悲しそうにしながら、こちらでもデバイスモードへと戻す。

だが、意を決したようにフェイトに対して訊ねる。

「私が勝つたら、ただの甘ったれた子じゃないって分かってもらえたら・・・お話、聞いてくれる？」

その言葉にフェイトは軽く頷き返す。

そしてこの2人のやり取りに注目しているユーノとアルフを差し置いて、士郎がジュエルシードに近づき、触れることはせずに目で見ることで解析をかける。

（・・・ある種の高魔力エネルギー結晶体か。本来は何らかの動力機関やエネルギー供給機関として使用されるものようだ。確かに願望器としての機能もあるようだ。・・・これは後付か？まともな願いの叶え方をしないと聞いたが、先ほどの木が変貌したのもその所為か。・・・それにしても何だ？この嫌な感覚は？まるで空間の歪みを助長しているようだ・・・）

士郎が見るだけで詳細に解析できるのは剣などの武器やそれを防ぐ防具などに限られている。

だからこの宝石を詳しく調べることはできない。

だが、おおよその構造や能力ぐらいは調べられるのだ。

（・・・この宝石・・・これと同じ感覚をどこかで・・・）

士郎はジュエルシードの放つ魔力と、それが作り出す空間の歪みに覚えがあった。

かなり前と、つい最近のことだ。

（・・・っ！？そうか！この感覚、どこかで覚えがあるかと思えば、12年前の聖杯戦争と今回の件で開いた『孔』に感じた不快感と同様のものだ！・・・だとすれば、これは想像以上に危険で厄

介な代物だぞ・・・!!」)

士郎は視線をジュエルシードからなのはとフェイトに戻す。
もし、士郎の予測が正しければ、これはあんな10歳前後の子供が
関わっていいようなものではない。

どうやって彼女達に手を引かせるべきか考えながら、士郎は今ま
さに始まるうとしている2人の戦いを見ていた。

だが、2人のデバイスが衝突しようとした瞬間、突如として2人の
間に魔方阵が展開され、そこから黒い戦闘服に身を包んだ1人の少
年が飛び出し、なのはのデバイスを左手で、フェイトのデバイスを
右手に持ったデバイスで受け止めた。

「ストップだ!!」

突然現れた少年はなのはとフェイトに戦闘の停止を命じる。

「ここでの戦闘は危険すぎる!時空管理局執務官、クロノ・ハラオ
ウんだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか」

それを聞いた士郎は、内心自分の運の悪さに呆れていた。

(・・・やれやれ、今一番関わりたくないものに早速に出会ってし
まったか・・・ここまで運が悪いと、ある種の呪いだな)

i n t e r l u d e

次元空間内 アースラのブリッジ

アースラのブリッジの大きなモニターには、先ほどから始まっているのはとフェイトの木の化け物との戦闘が映っていた。

2人の管制官から、リンディとクロノに報告が上がる。

「現地では既に2者による戦闘が開始されている模様です」

「中心となっているロストロギアのクラスはA A +。動作不安定ですが、無差別攻撃の特性を見せています」

その報告を聞いたリンディは艦長席から立ち上がり、クロノに指示を出す。

「次元干渉型のロストロギア・・・回収を急がないといけないわね。クロノ、出られる？」

「転移座標の特定はできてます。命令があればいつでも行けますよ」

「それではクロノ執務官、現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収、両名からの事情聴取を行ってください」

「了解しました、艦長」

任務を拝命したクロノは、艦長席の後ろにある転送ポートへと向かう。

それをリンディは艦長としてではなく、母親として見送る。

間延びのしたのんびりとした声をかけながら、手に持ったハンカチをひらひらさせながら。

「気をつけてね」

「はい・・・行ってきます」

それをクロノは困ったような顔で行ってきます、といいながら内心恥ずかしさを通り越して呆れたような感じで答えた。

母親の性格と態度に小さな溜息を吐いてから、クロノは意識を強引に戦闘モードへと切り替え、現場へと転移した。

映像に映っていた2人の少女の戦闘を停止させるために・・・。

i n t e r l u d e o u t

突如として現れたクロノに、フェイトもなののはも驚きと戸惑いから動きを止めていた。

それを確認したクロノは止めた2人のデバイスを離し、徐々に高度を落としながら2人に武器を収めるように指示した。

「まずは2人ともデバイスを収めるんだ」

クロノに合わせてなのはとフェイトも高度を下げ、地上へと足を下す。

「これ以上戦闘を続けるなら然るべき処置を・・・っ!」

2人と同じように地上に着地したクロノは、再度そこにいる全員に戦闘行動の停止を促そうとした。

だが、その言葉をアルフがクロノに魔力弾を3発同時に打ち込むことで遮った。

クロノは咄嗟に魔方陣の形をしたシールドを、魔力弾の入射角に対して浅くなるように自らの前面に展開した。

魔力弾はそのままシールドに突っ込むが、難なくシールドに弾かれ、逸らされてしまった。

だが、アルフはそれを気にした風もなく、フェイトに退くように言いながら次弾を展開する。

「フェイト！撤退するよつ、離れて！」

フェイトはそれに躊躇いを見せたが、アルフの次の魔力弾による攻撃に合わせて上空へと離脱する。

直後、アルフの放った魔力弾がクロノの足元に着弾し、派手に土煙を上げる。

クロノとなのはは低空で滑るようにして飛ぶことで魔力弾を回避したが、目の前が土煙で覆われてしまう。

その隙にフェイトは空中に静止したままのジュエルシールドに手を伸ばす。

だがそれを感じ取ったのか、クロノが土煙の向こうにいるであろうフェイトに向かって容赦なく複数の魔力弾を発射した。

「フェイト！」

「フェイトちゃん！！」

その攻撃を見たアルフとなのははフェイトに警告を発するが、フェイトが迫り来る魔力弾を視認したときには、既に回避も防御も不可能な状態だった。

（やられる・・・っ！）

そう思ったフェイトだったが、クロノの放った魔力弾は目前で「何か」によって全て打ち落とされた。

「・・・え？」

「何！」

驚きはフェイトとクロノのもの。

クロノは横から魔力弾を貫いた「何か」の発射元を素早く確認する。そこに立つ黒鍵を片手に持った士郎を見とめ、自分の魔力弾を打ち落としたであろう士郎に視線を向けて怒鳴りつける。

「貴様っ、どういっつもりだ！」

「どうもこうもあるまい。あのような幼い少女に無警告で攻撃するなど、正気かね？」

自分を怒鳴りつけたクロノに物怖じすることなく、士郎は呆れたように言い放つ。

その態度が癪に障ったのだろう。クロノが先ほど以上の怒声で言う。

「先ほど戦闘を停止しろと警告したはずだ！」

「1度の警告に従わないからと言っていきなり武力行使かね？やれやれ。本来なら再度警告するなり、威嚇射撃を行うべきだろうに・・・。時空管理局というものの程度が知れるな」

「なっ、なんだと!!！」

クロノは先ほど以上に激昂している。

そんなクロノの怒りなどどこ吹く風で、士郎の態度は変わらない。その士郎がふと気付いたように上空へ1本の黒鍵を投げ上げる。

それは、士郎とクロノが言い争っている隙にジュエルシードを回収しようとしたフェイトとジュエルシードの丁度中間の空間だった。そのときのフェイトと黒鍵の軌道との距離は絶対に当たらず、しかしその一投をその間近で見たものは一瞬の恐怖から、反射的に停止を余儀なくされる絶妙な距離だった。突然のことにフェイトもクロノも驚く。

「ここは引きたまえ、黒き魔導師よ。今ここで時空管理局に拘束されるというリスクを冒すか、それとも無事に逃れて次へと繋げるか。君はその執務官君よりは賢そうだから、分かるだろう？」

「なんだとっ！」

最後の一言にクロノが敏感に反応する。

だが士郎はクロノを無視してフェイトに目をやった。

その時、士郎とフェイトの目が合った。

そして士郎は見た。その少女の瞳に映し出された悲しみを。

いや、悲しみという言葉では足りない。強いて言えば悲しみよりも絶望に近い光を宿した瞳。

それはあの歳の少女にしては不釣り合いな目だった。

士郎のように年齢が後退したなら分かるが、彼女の言動やなのはからの話を聞いた限りではその可能性は低い。

ではなぜそのような目をしているのか、士郎は気になった。

そして同時に思ったのだ。この少女を放っておいてはいけない、とフェイトの方は士郎を見て一瞬迷ったようだったが、ここで争うことを不利と判断したのだろう。ジュエルシードを諦め、使い魔であるアルフと共にその場を離脱しようとする。

それをさせまいとクロノがデバイスを構えるが、フェイトとデバイスを結ぶ射線上に今度はなのはが割って入る。

「ダメ!!」

「何？」

「お願いっ、撃たないで！」

驚き躊躇するクロノ。

その隙にフェイト達は多重転移を使って逃走した。

フェイトがその場から逃げた後、なのははフェイト達がなくなった方向を不安げに見ていた。

その間にジュエルシードを回収するクロノ。

士郎は不安そうにフェイト達がいなくなった方向を見続けているのはを暫く見ていたが、なのはと同じ方向をチラッと見た後、執務官と話すべくそちらへと足を向けた。

1章3節 接触

4月27日 臨海公園

フェイトとアルフが離脱した後、クロノはジュエルシードを回収し、なのははそれを側で見ている。

その2人と1匹に士郎が話しかけようとして近づいたとき、空中に魔方阵の形をしたモニターのようなものが突如として出現した。モニターに移っていたのは緑色の長髪をポニーテールで纏めた、額に印のようなものがある女性だった。

（空中の何もないところにモニターとは………本当にSFじみてきたな）

そんな感想を心の中で漏らしつつ、近づいて会話に耳を傾ける。

「クロノ、ご苦労様」

「すみません、片方は逃がしてしまいました。……彼のおかげで」

そう言いながらクロノは士郎を軽く睨みつける。

それに対して士郎はなんでもないように肩をすくめて見せた。

クロノはその態度がほど気にくわなっかのだろう。先ほどよりも強く士郎を睨めつけていた。

「まあ、大丈夫でしょう。それでね、ちょっとお話を聞きたいから、そっちの子達をアースラに案内してあげてくれるかしら？」

「了解です」

「待ちたまえ」

なのは達をアースラまで連れて行くと言うことで話が纏まりかけたとき、士郎がそれに異議を唱えた。

「・・・なんだ？」

クロノの反応は冷やかだ。

先ほどまでフェイトを庇ったり、クロノを挑発したことで半敵対状態にあったのだから無理もないことだが。

「これは任意同行と受け取って構わないのかね？」

「ええ、そうだけれど？」

士郎の質問に画面の中の女性——リンディが肯定を示す。

それを聞いた士郎はニヤリと口元を吊り上げて、

「では拒否する」

なんてことを言い出した。

その言葉に3人と1匹は驚きを隠せない。

なのはとユーノは士郎がまさかそんなことを言うとは思ってもおらず、クロノとリンディはハッキリと拒否を示されたためだ。

だが士郎としてはこのまま相手のペースに巻き込まれるわけには行かない。

彼らが本物の時空管理局であるという保障はないし、本物だったとしても公正な組織であるかどうかはわからないのだ。

ユーノからある程度のことは聞いているので、公の組織なのだから

それほどあくどい組織ではないことは分かっている。

だが「表向き」はそうでも「裏」で何をやっているかはわかったものではない。

それが組織というものだ。

それに士郎の魔術は元の世界でもこの世界でも異端だ。

もし自分の能力を知られてしまえば何をされるかわかったものではない。

「なっ・・・君は！」

もちろん、クロノがそれに対して怒りを露にする。

だが士郎はクロノのことなどこ吹く風だ。

既に士郎の眼中にクロノは映っておらず、リンディと向き合い交渉に入っている。

ここで何としても士郎は自分やなのはとユーノにとって、有利な状況を作り出さなければならない。

自らのことも重要であるが、幼い彼女達を危険にさらしたり、彼女達の未来を狭めてしまったり奪ったりされない事も重要なのだ。

「お前達の命令に従う義務は我々にはない。それが『任意』なら尚更だ」

「君は・・・」

「待ちなさいクロノ。・・・なぜ？と訊いてもいいかしら？」

士郎の言い分に物申そうとしていたクロノは、リンディに止められて渋々引き下がった。

リンディは士郎の目を見ながら、真剣な表情で話している。

「ふむ、そちらの女性はこの執務官殿よりも優秀なようだ。差し詰め、今回の一件を任された責任者と言ったところかな？」

リンデイの対応を見て、士郎はこの女性が如何に優秀であり、こういった話し合いの場に長けていることを理解した。
相手にとって不足はない。

「いいだろう。まず理由の1つとして、君達が本物の時空管理局の人間であるかという点だ。君達がジュエルシードを狙っている犯罪組織、という可能性も捨てきれない。もしそうだとするならば君達の本拠地へ行くのは危険だと言うこと。・・・何の身分の証明もせずに信じろと言う方に無理があると思うがね？」

「ぐ・・・」

士郎は自分の言い分に文句を言おうとしていたクロノの様子に気づき、彼の口から文句が出る前に自らの論旨の正当性を挙げてそれを封じる。

士郎の言い分が正しいだけにクロノは悔しそうに声を漏らすしかない。

「2つ目。私とその彼女は現地の人間だからな、君達管理局のことを知らない。そのフレットから話ぐらいいは聞いているがね。君達がどういった組織なのか理解できていない時点で、無闇に信用など出来るはずがない。それに、このフレットから聞いているがここは管理外世界なのだろう？なら、君達の命令や法律に従う義務など、最初から持ち合わせてなどいない」

「3つ目。・・・コレが最も重要なのだが・・・」

士郎は一旦言葉を切り、いかにも重要な事柄を口にする。
それは士郎にとっても、そして第3者が聞いても同意する内容だった。

「子供を戦いの場に出し、あまつさえ非殺傷設定とはいえ、問答無用で女子供に攻撃を加えるような人間のいる組織を、信用できるはずがあるまい？威嚇射撃を行ったり拘束系の魔法を使うなりやりようはあったはずだ。だがそこにいる執務官とやらが選択した行動は『攻撃して倒し、動きを封じる』だ。彼が元々暴力的な人間だったとしても、それを管理できていない時点で君達の非は明らかだ。・・・話を聞きたい、信用して欲しいというのであれば、武装を解除した上でそちらから出向くのが筋だろう」

「・・・っ・・・」

普通に考えて真つ当な組織が小さい子供、それも少女に問答無用で攻撃を加えることがあっていいはずがない。

それが非殺傷設定だったとしても、現代で言えばゴム弾やスタンガンを子供に使って使用するようなものだ。

想像してみたい。万引きなどで犯罪を犯した子供が、暴れて言うことを聞かないからと言って警備員や警察官がゴム弾やスタンガンをその子に使う光景を。

そんな光景を目にすれば誰でもその者達に不信感を抱くはずだ。あんな横暴が本当に正しいのか、と。

まさしくクロノが取った行動がそうだ。

無論、彼にもそれなりの理由がある。

最初に攻撃してきたのはフェイトの使い魔のアルフだし、フェイトも子供とは思えないほどの高位の魔導師だ。彼女達の反撃を受けていたらクロノとて危なかっただろう。

そついった事態を未然に防ぐためには、多少強引でも止めるしかない

かったのだ。

しかし、士郎の言う通り、バインドなどの拘束系魔法の使用を考慮せずにいきなり攻撃を行ったクロノの判断は軽率であったと言わざるを得ないだろう。

それを一番理解しているのは士郎の言葉を聞いたクロノ本人だ。故に、何も言い返すことが出来ない。

「・・・そうね。・・・こちらに非があったのは認めます。ごめんなさい」

「艦長！」

「クロノ、身分証を掲示して」

「・・・了解しました」

少しリンディが強めの語調でクロノに指示する。

クロノは渋々それを了承し、懷からIDカードを取り出して士郎達に向けて掲示する。

クロノが差し出したIDカードを見ながら、士郎はの中で一番管理局のことを知っているユーノに確認を頼んだ。

「ユーノ、これは本物か？」

「・・・うん。本物だと思う。それにこのクロノ執務官って人、前に時空管理局の人材募集のCMや雑誌の記事なんかで何度か見たことがあるから、間違いないと思うよ」

「幻影や変装でその執務官の名を騙っている可能性は？」

「変身魔法や幻影魔法なんかは働いてないみたい。変装は・・・整形でもしてない限りないと思う」

その言葉に士郎はもう一度クロノを『見る』。

顔には不自然な歪みや腫れや変色、手術跡などは見当たらないし化粧もしていない。

髪も鬘や植毛ではなく自前のようなだし、染めている形跡もない。

そのことから変装や整形の可能性はなく、またユーノが変身・幻影魔法を否定した以上本物であると言えるだろう。

「分かった」

「ようやく信用してもらえたか」

「まだだ。我々の安全が確保された状態で交渉の場を設け、詳しく話を聞いた上でなければな」

「・・・随分と慎重だな」

「ふ、なにぶん『組織』というものに不信感があってね。そこに所属している人間全てを信用していない、などと言うことはないが、君達とは出会って間もない。故に信用に足るかどうかを見極めてからでなければな」

士郎は自分の世界で魔術協会や聖堂協会の闇の部分を見てきた。

特に魔術協会などはお互いを如何に騙して自分達の利益を得るかしか考えていない連中の集まりだ。

もちろんそんな人間ばかりではない。

凜やルヴィア、時計塔で出会った何人かの親しい友人たちのように魔術師らしくない魔術師も意外とたくさんいる。

だから組織の中にも信用できる人間はいるということは知っている。だが、士郎は先ほどのクロノの行動が気に食わなかった。

正義という言葉に溺れ、法を盾に自分勝手に武力を行使する者。そういう印象を抱かせるには十分な行為だったのだから。

もし彼ら時空管理局がそういった連中ばかりなら、私欲を隠そうともしない魔術師よりも性質が悪い。

故に慎重に彼らが信用できる人物なのかを見極める必要があるのだ。……もつとも、士郎から見たリンディの印象は「食えない人物」だったために、余計に慎重になっているのだが。

「……分かりました。私がそちらへ行きましょう」

「艦長!？」

交渉は如何にして相手を自分に有利な条件化に置くかが重要になる。その点でいえば、交渉の場に相手の責任者を引きずり出した時点で、まずは士郎の一勝だろう。

だがそれは手を抜く理由にはならない。

交渉相手を自分に有利な、少なくとも公平な交渉が行える場所に引きずり出してからが本番なのだから。

「私がそちらへ行くのが、せめてもの誠意だと思ってください。ただし、クロノ執務官も同席しますが了承していただけるかしら？」

「ああ、構わない。護衛も連れずに責任者がのこのこと出てくるようでは逆に信用できんからな」

「ありがとう。それじゃあ直ぐそっちへ行くわね」

暫くして、クロノが現れたときと同じようにユーノの張った結界内に魔法陣が出現し、その中からリンディが姿を現した。その後、現れたリンディとクロノと共に士郎達は公園の休憩所へと移動し、そこで向かい合って座る。

「時空管理局次元航行艦『アースラ』艦長、リンディ・ハラオウンです。よろしくね」

「改めて。時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ」

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「衛宮士郎だ。こうして直接顔を合わせるのは初めてだな、ハラオウン艦長」

「はじめまして。それと名前で呼んでいただいて構いませんか？」

「そうか。ではこちらにも名前でもらって構わない」

「では早速だけれど、本題に入って良いかしら？」

こう切り出したリンディが今回の一件で時空管理局が動くことになった理由を説明した。

その時に時空管理局がどういった組織なのか、どうしてこの世界では未成年とされている子供が働いているのかなどを丁寧に説明した。リンディとクロノからの説明が終わった後、今度はユーノが今回の発端から順を追って話し始めた。

自分がジュエルシードを発掘したこと、なのはのこと、次元震が発生したときの状況とその時に現れた士郎のこと。

士郎のことを話したときはリンディもクロノも大分驚いていた。

「・・・そうですか。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「はい・・・それで僕が回収しようと。けど負傷してしまって、なのはに協力をお願いすることになってしまっただけ・・・」

「立派だわ」

「だけど、同時に無謀でもある。現に君は傷を負い、現地の人間に助けを求めなければならぬほどに消耗した。あまり褒められた事じゃない」

クロノの言葉にユーノは反省するように俯いてしまった。

「あの、ロストロギアって何なんですか？」

「ああ、遺失世界の遺産、って言ってもわからないわね。えっと、次元空間の中には幾つもの世界があるの。それぞれに生まれ育っていく世界。その中に、極稀に進化し過ぎる世界があるの。技術や科学、そして魔法などが進化し過ぎたそれらがその世界を滅ぼしてしまっただけ、その後に残された危険な技術の遺産。それらを総称してロストロギアと呼ぶの」

「本来の使用法は不明だが、使いようによつては世界だけでなく次元空間までも滅ぼすことがある、とても危険な技術の塊。然るべき手続きを取って、然るべき場所に保管されていなければならない代

物だ」

「あなたが探しているジュエルシードは次元干渉型の高エネルギー結晶体なの。いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内で次元震を引き起こし、最悪の場合次元断層を引き起こす危険物・・・」

「君とあの黒衣の魔導師が衝突したときに起きた衝撃波と振動、あれが次元震だよ。そしてごく小さいし、次元断層とはちよつと違うけど、空間の穴、ワームホールも発生した。・・・そこから人が出てきたって言うのは流石に驚いたけど・・・」

そう言つてクロノは士郎に目をやる。

士郎は話しは聞いているようだが、どこ吹く風である。

クロノは視線をなのは達の方へ戻し、話を続ける。

「・・・たった1つのジュエルシードの、全威力の何万分の1の発動でもあれだけの影響があるんだ。複数、特に21個全てが集まつて発動したときの影響は計り知れない」

「聞いたことがあります。旧暦の462年、次元断層が起こったときのこと・・・」

「ああ、あれは酷いものだった・・・」

「隣接する次元世界が幾つも崩壊した、歴史に残る悲劇・・・繰り返しちゃいけないわ」

クロノとリンディの顔が暗く沈む。

士郎やなのはからしてみれば、それらがどういったものか詳細は分

からない。想像するしかない。

だが、士郎が出てきたときの状況やその時に発生した衝撃波の規模を見聞きした上で考えると、それが如何に危険かということは理解できる。

『空間に干渉する』ということは、根源へ至るための『孔』を開けることと似ている。

もしかしたらジュエルシードとは根源へ至るためにどこかの誰かが作り上げた物ではないだろうか。

現に士郎はジュエルシードから聖杯と似た空間の歪みを感じている。その可能性は高いだろう。

それは世界を脅かすのと同義だ。次元断層もそれと同じようなものだろう。

故に、士郎はその次元断層の発生やロストロギアの生まれた世界が滅んだと言つのは、おそらく抑止力が働いたのだろうと予想していた。

世界は自分を傷つけることや矛盾を嫌う。

故に確実にその原因を取り除くために、その周辺のものも一緒に消滅させてしまうのだ。

世界の意味は次元世界の中にはいくつも世界があるため、1つや2つの世界が滅んだところで問題ないと認識していることだろう。

9を救うために残りの1を切り捨てる。それが世界のあり方。

世界の意味は『世界』^{ガイア}の存続や『霊長』^{アラヤ}の種の保存さえできれば、そこに存在する人間のことなど関知しないのだから・・・。

「これよりロストロギア、ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「え？」

「君たちは今回のことは忘れて、それぞれの世界に戻って、元通り

暮らすといい」

「……………」「でも、そんな……」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人が介入していいレベルの話じゃない」

「でも……!」

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜ゆっくり考えて3人で話し合って、それから改めてお話をしましょ。士郎君は次元漂流者として保護しますので、その時にでも詳しくお話ししよう」

「保護の必要はない。自分の面倒は自分で見る。それに、私はまだ君達を信用したわけではないのでな」

リンディの話に士郎は拒絶を示し、まだ自分は君達を信じないという。

「……あれだけ説明したのに、まだ信じられないのか?」

「当然だろう。子供を戦わせようとする人間を誰が信じるというのかね?」

士郎のその言葉にクロノは憤慨した。

確かにそのような誤解をさせたのはクロノだろう。だがそのことについては丁寧の説明したし、士郎も理解を示していたはずだ。

なのにまだ信じられないと言うのだから。

「だからそれはさつきも説明しただろう！時空管理局は人材不足なんだ。だから僕達の世界では、条件さえ満たしていれば子供でも働けるんだ！」

「私が言っていることはそういうことではない。意図的に民間人の子供に協力をしよう、誘導する人間は信用できない、と言っているのだ」

「誰がそんなことをした！僕は君達には手を引くようにと・・・！」

「確かに君はそうだろう。だが、そちらの艦長殿はどうか」

士郎は意味深な言葉と視線をリンディに向ける。

そこにいる士郎とリンディ以外の者は訳が分からないといった感じだ。

「どういう意味かしら？確かにあなた達の力は貴重だけれど、民間人の、何の訓練も受けていない子に危険なことはさせられないわ」

リンディは士郎の言葉の意味が判りませんといった風に装う。

「では訊こう、なぜ次元震や次元断層の話をした？」

「それはこの事件がどれほど危険か理解してもらった上で、納得して手を引いてもらいたかったからよ」

「それは嘘だな。ではなぜ考える時間を与えたのかね？民間人を危険にさらせないと言うならば、問答無用で閉め出すことが一番だ。なのはのデバイスを一時的に没収し、ユーノを元の世界に送り返す

などすれば彼女達はこの一件に介入できなくなるのだからな。話し合いなどする時間を与える必要はない。だが君達はわざわざ危機感を煽るような話をしてから相談の時間を与えた。そんなことを聞かされれば大抵の人間は思考を殆ど制限される。それに、その2人は責任感が強い。それは先ほどの話からも分かる。だから事件を早期に解決するために”何かしなければならぬ”という考えを植えつけるのは、そう難しい話ではない。そうなれば出てくる結論など1つだけだろう」

そう言つて士郎は一旦言葉を切り、リンディの様子を確認する。その表情は変わらないが、足の上に添えるようにして置かれていた手が今では拳になっている。

気配も堂々としたものから動揺を隠そうとするように僅かではあるが揺らぎが感じられる。

士郎の言葉は的を射ていたようだ。

「君の狙いは、我々に自発的に協力を申し出るように仕向けることだ。自分達から協力を要請しないのは体裁や責任の所在の問題だろう。子供、それも管理局員ではなく民間人となれば、いくら就業年齢が低い世界でも世論から批判を受けるのは目に見えているからな。その上、そちらから協力を要請しておいてなのは達には何かあれば、その批判を真っ向から浴び、責任を取らさせるのは君達だろうからな。加えて、先ほど執務官が言っていただろう？」管理局は人材不足だ”と。私の見解としては、ジュエルシードの封印にはそれなりの魔力が必要だ。そして君達の次元航行艦・・・アースラと言ったか・・・そこにはジュエルシードの封印を出来る人間が、ここにいる執務官しかいない。あの黒衣の魔導師と対等以上に戦えるのも彼だけだろう。今回の戦闘で彼しか戦闘に介入してこなかったことがそれを裏付けている。だが、できれば万が一の事態が起きたときのために彼は温存しておきたい。そうなると、なのはの魔力やジュエ

ルシードの発掘者であるユーノは喉から手が出るほど欲しい・・・
違うかね？」

「・・・確かに、あなたの言う通りです。こんな手段で協力を取り付けようとしたことを謝罪します。・・・ですが、どうか力を貸していただけませんか？この事件はそれだけ深刻なのです。最悪の場合、次元断層によって多くの命が失われてしまう。もちろん、私もなのはさん達のような歳の子を犠牲にするつもりはありません。危険なときは全力で守ります。・・・お願いできませんか？」

「か、母さ・・・艦長！」

暫く探り合うように目を合わせていた士郎とリンディだったが、士郎がリンディの真剣な眼差しとそこにある誠意を感じ取り、彼女からの要請を受けることにした。

とはいえ、士郎は初めから今回の件には協力するつもりでいた。

時空管理局という第3勢力が登場した以上、可能ならその不確定要素を排除したい。一緒に行動していれば少なくとも目的と行動内容を把握できるしその対策も取れるからだ。

それに、もし協力しないと言うことになって閉め出されることになれば、責任感の強いユーノやなのはは独自行動に出かねない。そうになると非常に危険だ。士郎の目の届く範囲で動くならともかく、目の届かないところでバラバラに行動されては危険なときにサポートに入れない。

だから時空管理局と協力関係になることで、士郎の目が届かなくとも代わりに彼女達を監視・サポートしてくれるのならば好都合だった。

「いいだろう、そちらから協力を要請された以上、私は協力することに異存はない。なのは、ユーノ、君達はどうだ？」

本音を言えば士郎はこの2人はもちろん、フェイトにも今回の一件には関わって欲しくないし戦って欲しくない。その淡い希望こめて協力するかどうかを訊ねた。
だがこの2人も、そしてここにいないフェイトも、自分の意思を譲ることはないだろう。

「ジュエルシードを発掘したのは僕だし、最後まで協力したい」

「あたしはユーノ君に最後まで協力したい。それにあの子のことが気になるの・・・だから協力させてください」

「分かったわ」

なのはとユーノの答えは士郎の希望を裏切るものでもあったが、予想通りの返答でもあった。

だから問題はこれから交渉の内容に掛かっている。

いかに自分の利益と、なによりなのはとユーノの身の安全と未来を守るかがこの交渉で決まる。

士郎は、せめてなのはとユーノにだけは危害が及ばないようにしなければならいと考えていた。

「では協力するに当たっていくつか条件を出させてもらおうか。それと、協力の対価としてそれ相応の報酬を要求させてもらう」

士郎の言葉に3人と1匹は驚きを隠せない。

条件はともかく、誰もまさか報酬を要求してくると思わなかったのだ。

だが士郎は何の報酬も受け取らずに人助けをすることは『貸し』の押し付けだと知っている。

それに何の報酬も要求せずに命を賭けるなどということをしていれば、いつかは他人から不信に思われ、不気味がられて排除されてしまう。そうなってしまうてはアーチャーと同じことになってしまうだろう。

だから「最低限の報酬を要求し、もし相手がそれを申し出てきたらならばそれを受ける」こと。

これは凜やルヴィア、イリヤに耳に胼胝ができるほど聞かされたことだ。

もしその言いつけを守らなかったら、凜達が強制的に報酬の回収を実行してきた。

それには士郎も困ったものだ。なにせ彼女たちは、本来の報酬以上の対価をもぎ取ってくるのだから……。

それ以来、士郎は最低限の報酬は要求するし受け取るようにしている。

もつとも、その報酬が目的ではないのは相変わらずではあるが……。

「驚くことではあるまい？ 協力を要請してきたのはそちらだ。ならば協力要請を受けた我々にはその対価を受け取る権利があると思うがね。そもそも、無条件でそちらに従うことになってはここまで交渉を進めた意味があるまい？ それに、君達としても報酬を用意する、という行動を取ることではいくらか体裁は整えられるのではないかな？」

「……いいでしょう。ただし、こちらからも幾つか条件を出します。条件は2つよ。3名とも身柄を一時、時空管理局の預かりとすること。それから指示を守ること。それで構いませんか？」

「ふむ、いいだろう。ではこちらの条件だ。

まず1つ目。万が一我々が危機に陥った場合には、なのはとユーノ

の安全を第一に優先すること。

2つ目。先のそちらの2つ目の条件に対して、我々にある一定の指示に対する拒否権と自由行動の権利を与えること。もちろん、最大限そちらの指示には従う。だが、指示に絶対服従では万が一のときに動けなくなるのでな。

3つ目。これは私の個人的なものだが、魔法に関する可能な限りの情報の開示と提供。ある程度はユーノから話は聞いているが、まだ理解できていないことや知らないことも多いからな。

最後に、私にリンカーコアがあるかどうかの検査を行い、リンカーコアが存在した場合、報酬として専用のデバイスを用意し、魔法の指導を行うこと。もちろんのはにも指導は行ってもらう。以上だ」

「1つ目と3つ目に関しては問題ないわ。2つ目に関しては、私達の作戦行動に支障をきたさない程度なら許可しましょう」

「無論だ。だが、その作戦行動が『正しくない』と判断したときは全力で抗わせてもらうが、構わないかね？」

士郎の条件にリンディは眉根を寄せる。

それは士郎が『正しくない』と判断すれば敵に回る可能性があるということだ。

本来ならそんな条件は否定するところだ。

だがリンディとクロノはここまで士郎にミスや弱みを見せてばかりだ。

もはや交渉の流れは士郎が握っている。ここで拒否を示したところで簡単に切り返されそうだし、無意味だろう。

「・・・言いたいことはあるけれど、まあいいでしょう。それでそちらの最後の条件なのだけれど・・・なのはさんへの魔法の指導は分かるとして、あなたのリンカーコアをチェックするのと、デバイ

スの提供と言うのは？士郎君は魔導師ではないの？」

「違うな。私は私の世界では『魔術師』或いは『魔術使い』と呼ばれていた。魔導師とは違いデバイスを使わないのが基本だ。なにか補助的なものが必要なときは『魔術礼装』と呼ばれる専用の補助道具を使っていた。君達のデバイスのように汎用性は高くない、限定された機能を果たすだけのものだがね。加えて、私達の魔力生成器官はリンカーコアではなく、『魔術回路』と呼ばれる擬似神経だ。その私や私の世界の『魔術師』が使う術は『魔術』と呼ばれ、君達のような科学の結晶ではなく、自分の身と世界の理をもって力を使用する。君達のいう『魔導師』と『魔術師』である私は根本的に全く違うものだ」

士郎は本当は魔術のことは隠しかった。だが、彼は先の戦闘で魔術の一端を披露しており、リンディ達はそれを監視していたのだ。それにこれから行動を共にするのだから魔術のことを完璧に隠蔽するのは不可能だろう。

ならばあえていくつかの情報を断片的に与えることで、追及の手をいくらか回避したほうがいいだろう。

今回の一件さえ片付けばデバイスや魔法の指導が受けられ、その後は魔法を主に使用すればいいのだから、それまでにどれだけ魔術に関する追求を回避できるかが重要になる。

士郎はそう判断し、デバイスや魔法の指導のことを報酬に盛り込んだし、魔術のことを重要な点は隠して話すことにしたのだ。

「じゃあ、その魔術を使えばいいんじゃないのか？わざわざデバイスを使ったり、僕達の世界の魔法を覚えたりする必要はないだろう」

「それはそうだが、私の魔術はこの世界や君達の世界では私にしか使えない特殊なものだ。ユーノが言っていた、確か『レアスキル』

とか言ったか？それと同じようなものだ。この世界では異質すぎる。それに、非殺傷設定などという都合の良いことが出来ないのだな。使えば相手を殺してしまう可能性がある。手を抜けば怪我程度で済みますことも可能だが、君達魔導師は皆強いからな。手加減できる自信がない」

「・・・随分と物騒だな・・・」

士郎の「殺してしまう」という内容にクロノは顔を若干引き攣らせながら言い、なのはとユーノは引き気味だ。
リンディは士郎の言う『魔術』という魔法体系が、自分たちのそれと大きく異なることについて考えていたが一旦思考を打ち切り、士郎の言い分を一応認めることにした。

「そういうことなら構いません。ただ、デバイスは用意するのには時間がかかります。あなたの要望を聞いてこの事件が終わった後、専用のものを用意するという事でいいかしら？」

「ああ、感謝する」

士郎のその言葉で交渉は終了した。

終わってみればその大半が士郎の勝利であったが。交渉が終わったことを察したクロノは立ち上がり、早速行動を開始することにした。

「ではリンカーコアの検査をするから、アースラまで来てくれ」

「了承した」

士郎は立ち上がって前を歩くクロノとリンディについていこうとし

たが、ふと思いついたようになのは達を振り返ってこれからの予定をなのはに伝えた。

「私はこのままアースラに行くが、なのはとユーノは一度家に帰った方がいいだろう。恐らく、これからはアースラでの行動が中心になるだろうしな。その準備と、ご両親に外泊の許可をもらってきた方がよい。リンディとクロノには私から言っておく」

「うん、わかった」

なのはの返事を確認した士郎はリンディになのは達を一時帰宅させることを告げ、許可を取り付けた。

そのときの話し合いで、なのはとユーノは明日の朝早くに臨海公園に来てアースラへ乗艦することとなった。

そして士郎はそのまま転移魔法でアースラへと移り、なのは達は自宅へと帰って行った。

i n t e r l u d e

次元航行艦アースラ艦内

モニターがズラリと表示された一室にクロノと補佐官のエイミイがいた。

彼らが見ているモニターの中には、今日のジュエルシードとなのは達の戦闘の様子が映し出されていた。

「すごいや〜。どっちもAAAクラスの魔導師だよ〜。こっちの白い服の子、なのはちゃんって言ったっけ？クロノ君の好みっぽい可

「愛い子だし」

「エ、エイミィ、そんなことはどうでもいいだろう！」

エイミィはなのはとフェイトのデータを見て興奮気味に言う。もちろんクロノを揶揄うことを忘れない。

そのエイミィの言葉に頬を赤らめて動揺するクロノ。

そんな彼のことなどお構いなくエイミィは話を進める。

「魔力の平均値もなのはちゃんで127万、黒い服の子で143万。最大出力はその3倍以上。魔力だけならクロノ君を上回っちゃってるよね」

「魔法は魔力値の大きさだけでなく、状況に合わせた応用能力と的確に使用できる判断力だろう」

「うん、期待してるよ。アースラの切り札だもんね」

その時、モニタールームのドアが開きリンディが私服で現れた。

「あ、艦長」

「ああ、2人のデータね」

「はい」

そう言つてエイミィの座るシートにそつと手を掛け、映し出されるデータを見るリンディ。

だが、彼女の手はなのは達の映像を見ているうちにシートをきつく握り締めていた。

その行動はどういった感情からなのだろうか・・・。

「確かに、凄い子達ね」

「これだけの魔力がジュエルシードに注ぎ込まれれば、次元震が起きるのも頷ける」

「なのはさんとユーノ君、それに士郎君がジュエルシードを集める理由は分かったけど、こっちの黒い服の子はなんでなのかしらね？」

「随分と必死な様子だった。僕の攻撃が当たらなかったとはいえ、それでもジュエルシードを確保しようとしていたからね。それだけの目的があるんだろう・・・」

「目的、ね。・・・まだ小さな子よね。普通に育っていればまだ母親に甘えていた年頃でしょうに」

そう言ったリンディの言葉には悲しみとも同情とも取れる感情が乗っていた。

リンディはなのは達を戦いに引き込むようなことをした自分が言えることではないと思っていた。

しかし、やはり一人の母親として出来ればそのようなことはしたくなかったし、またそんな状況に置かれた子供のことを思わずにはいられなかった。

そんなリンディの呟きと想いに気付いていないクロノはもう一つの懸案事項を言った。

「それと、気になることがもう一つ」

「士郎君のこと？」

「ああ。彼はどこからかアンバランスな形状をした剣を取り出し、あの二人の魔力砲撃でも突破できなかったバリアを木っ端微塵に破壊している。その上、あれほどの大木を短時間で、それも灰が残らないほどまで燃やし尽くした火力を持っている。これだけでも十分異常なのに、彼が魔法を使うときに魔方阵が展開されなかった。つまり、事前の魔法の発動を予想できない。彼が敵になった場合、これほど厄介な敵はいないと思う・・・」

「・・・確かに。私達の知らない魔法体系が存在していたことにも驚いたけれど、その能力を見るとさらに驚かされるわね」

「確か、士郎君の魔力ってA-だったっけ？」

「それはリンカーコアの潜在能力値だよ。彼のリンカーコアは念話を使ったことで覚醒を始めてはいるけど、まだまだ魔法が使えるまでには覚醒してない。彼の『魔術回路』と呼ばれる魔力生成器官で作られた魔力の数値は、リンカーコアの魔力検査装置では誤差が出るようだったけど、大体Bクラス前後ということらしい」

だが、それも魔術回路を開いている時だけだ。閉じているときはFクラス未満となり一般人とあまり変わらない。

加えて、魔力の『性質』が違う所為かどうかは解らないが、今時空管理局が持っている魔力探查装置では士郎の魔力探知は非常に困難だ。

検査機器のように身体に直接接しているか、余程の至近距離で測定しなければ正確な測定、及び探知が出来ない。

その為魔力回路を閉じた状態で行動をされると補足出来なくなってしまう。

クロノ達は間近で魔術の発動を見てはいないが、恐らくは魔術につ

いても至近距離で発動しているものでもなければ感知が難しいだろう、と予想していた。

事実、今回の検査においても魔術回路の魔力値検査は誤差が酷かったために難航したのだから。

最終的に複数回検査した魔力数値の平均値でランクを決定したのだ。瞬間的な最大魔力放出量はそれを確実に上回るだろう。

「そう考えると凄いやね、彼」

「凄いや言っより異常だよ」

「私達の常識では、魔力値以上の威力持った魔法を発動することは普通出来ないものね・・・」

もちろん例外は幾つかある。

例えば、ベルカ式魔法のカートリッジシステムやユニゾンデバイスなどがこれに当たる。

だが、これらのシステムの制御は難しく、おいそれと使えるものではない。

そもそも、士郎はそれらの機能を有したデバイスを所有していない。それに彼女達は、士郎が放った黒鍵の威力は「砲撃魔法の類」だと誤認してしまっているのだ。

真実は純粹な投擲技法と結界破壊の魔術効果によるものなのだが、彼女達の常識には投擲方法を工夫しただけであれだけの威力が出せるなどとは思いつかないだろう。

そして火葬式典を付与した黒鍵の一投に関しても同様だ。

あれは魔力変換による火力ではなく、そこに秘められた『神秘』によるものだ。魔力値も関係ないわけではないが、これはむしろ魔術効果の方が重要なのだ。

もともと、彼女たちは知る由もないが、今回の戦闘では士郎は『宝

具』を投影していない。

もし今回の戦闘で士郎が『宝具』を使っていたら、ただでさえ元の世界でも異端だった士郎の異常性はより際立っていただろう。

ただ、リンディ達の常識ではバリアジャケットやデバイスなどを除いて魔力で物を作り出す、という発想はほとんどない。彼女たちはそれを「どこから取り出した」という認識をするだろう。

士郎もなのはやリンディにはそう説明していたから尚更だ。

もし彼女達が宝具を見たらほぼ間違いなく「ロストロギア」と勘違いするだろう。

「それに、彼は交渉の場にも慣れてるようだったし。駆け引きの仕方、こちらの意図を読み取る洞察力……多分、あの歳では考えられないような経験を積んできたんでしょね。それだけでも彼は油断できない人物だわ」

クロノと大して違わない歳、それも少しとはいえ年下だ。

それがそれなりの実戦を経験し、また交渉の場にも出ることがあるクロノよりも交渉術に長けていた。

戦闘の映像記録を見る限り、戦いの場においても同様だろう。

下手をすると執務官として様々な訓練を受け実戦を経験し、それでも自己鍛錬を怠らないクロノよりも強いかも知れない。

彼女達は士郎の異常性と得体の知れなさに、ただただ疑問と不安を抱くだけであった。

i n t e r l u d e o u t

1章4節 運命という名の少女 前編

4月28日 アースラ艦内の会議室

「と、いうわけで。本日0時をもって、本艦の任務はロストログア『ジュエルシード』の搜索と回収に変更となりました」

床全面から光が放たれているものの、若干薄暗い会議室に時空管理局次元航行艦アースラの主要メンバーが終結していた。

終結したメンバーにリンディが今回の任務の変更と今後の方針について伝達を行っていた。

そして、アースラスタッフに混じって士郎、なのは、ユーノの3人の姿もそこにあった。

ユーノは緊張からかガチガチに固まっており、なのはも真剣な表情で席に座っているがユーノと似たり寄ったりだった。それに対して士郎は目を瞑って腕を組み、非常にリラックスしていた。

その3人をリンディが他のスタッフに紹介する。

「また本件においては、特例として、問題のロストログアの発見者であり結界魔導師でもあるこちら・・・」

リンディに視線を向けられたユーノはバツと立ち上がって足を揃え、手も指先までピンと伸ばして直立不動の姿勢で自己紹介をする。
見てハッキリ分かる通り、ガチガチに緊張していた。

「はい！ユーノ・スクライアです！」

「そして彼の協力者でもある現地の魔導師さん・・・」

「た、高町なのはです！」

名前を呼ばれて立ち上がったのはだが、こちらもユーノと似たようなものだ。

ただ、ユーノよりは硬くなっていないようだった。

「・・・そして、ジュエルシードが原因と思われる事故に巻き込まれた次元漂流者で、今回、ユーノさんとなのはさんと共に協力してくれることになった・・・」

「衛宮士郎だ」

士郎は2人と違って立ち上がることもせず素っ気無く答えただけだった。

「以上3名が臨時局員の扱いで事態の解決に当たってください」

「宜しくお願いします」「宜しく頼む」

締めとして3人が挨拶をしたのだが、やはりここでもなのはとユーノがお辞儀したにもかかわらず、士郎は先ほどから変わらぬ姿勢で言っただけだった。

その失礼としか取れないような態度でいる士郎に、リンディや他のスタッフはともかく、クロノは非常に不機嫌に士郎を睨みつけていた。

任務変更の通達と3人の紹介を終えて会議室を後にするスタッフ達。そこでなのはとユーノに続いて会議室の外へ出ようとしたクロノとリンディを士郎が呼び止める。

「ハラオウン艦長、クロノ。少し構わないか？ 話がある」

「あら、何かしら」

「・・・碌でもない話じゃないだろうな？」

リンディはなんでもない風になっているが、クロノは士郎に対して警戒心・・・というよりも嫌悪していると言ってもいいような態度だ。士郎はそんなクロノの視線をなんでもないように話を続ける。

「なに、少し提案したいことがあるだけだ」

「提案？」

「ああ・・・あのフェイトという少女のことなのだが・・・」

実は士郎は、紹介されたときも会議中も、それどころか昨日の夜からずっと『ある事柄』について考えていたのだ。

会議中、ほぼ無言だったことや挨拶のときに失礼と取れるような対応だったのも、それが理由だった。

そして、会議中ずっと『あること』のことを考えて、士郎が出した結論は・・・。

「あのもう一方の搜索者の女の子ね・・・それがどうかしたのかしら？」

「彼女の搜索を私に任せて欲しい」

「はあ？」「何ですって？」

クロノとリンディが揃って疑問を投げかける。

なぜ士郎に搜索を任せる必要があるのかと。

士郎の主な目的は、なのはとユーノの安全確保とジュエルシードの回収補助であり、フェイトの搜索は当初の士郎の目的とは異なるのだから2人の疑問はもつともだ。

しかし、士郎も気まぐれでこのようなことを申し出ているわけではない。

「少々、彼女のバックが気になる。彼女を搜索・発見し、可能ならば情報を引き出したい。そうすれば今後の対策も取り易くなるはずだ。つまり、潜入捜査の許可が欲しい、ということだ」

「な……き、君は何を言「詳しい話を聞きましょう」っ！か、艦長!？」

「流石はハラOWN艦長。話が早くて助かる」

クロノは士郎の申し出を却下しようとしたが、リンディは取り敢えず士郎の意見を聞いてみることにした。

士郎はそんなリンディに感謝しつつ、なぜフェイトの搜索をする必要があるのか説明する。

「如何に君達の世界の魔導師の就業年齢が低くとも、あの少女の年齢ならば親がいるはずだ。……少なくとも保護者に相当する人物がいるはずだろう?」

「……それが彼女のバックにいる、と?」

「ああ。あの少女はなのはと違って魔法の訓練を受けているのだろう。それはユーノやなのはからの証言でも明らかだ。加えて、彼女

はデバイスを所有している。だとすれば、それなりの魔法の経験がある者が魔法を教え、そしてデバイスを与えたと言うことになる。そのような魔法経験者がジュエルシードの危険性に気が付いていないわけがあるまい。だとすれば、その危険性を把握した上で事に及んでいる可能性がある」

ユーノやなのはの証言。そしてクロノ達が記録した戦闘時の映像の分析結果からも、フェイトが高度な魔法の訓練を受けているであろうことが予想されている。

そのことはクロノやリンディも分かっている。

訓練を受けていたということは、少なくともその訓練を施した者が居る。

そして、その誰かはフェイトの年齢から考えても、つい最近まで側に居たことは間違いない。

加えて、フェイトのような少女が一人で生きていけるほど世の中は優しくできていない。今でもその誰かが側に居る可能性が高いと考えるのは自然だろう。

「他者に魔法を教えられるほどの実力と知識を持っている人間が、ジュエルシードに限らずロストロギアと呼ばれる物の危険性を知らないはずがない。そのような危険物を管理局から逃げ回ってまで回収したいというのは、やましい部分があるからだ。そうすると、万が一ジュエルシードがその誰かの手に渡ってしまえば、碌なことにならないのは明白だ」

「そうね。……けれど、あの子が自主的に集めているのだとしたら、その限りではないんじゃないかしら」

「確かに。しかし、彼女は元々この世界の人間ではないのだろう？ だとすれば、この世界で暮らせるように滞在先を用意した人物が

いるはずだ。そして生活するには金が掛かる。それらの生活環境を手配したのは誰だ？ 少なくとも彼女には無理だろう。こちらの世界では、社会常識から言って子供１人でホテルに宿泊したり、マンションなどを借りることは不可能だろう。いずれにしても、保護者がどうしているかの問題が残る。・・・いくら魔法が使えて使い魔もいるからといって、異世界に少女一人を放り込んでおいて放置、というのは考えにくいだろう」

「なるほどね・・・その人物が彼女にジュエルシードを集めるように強要している？」

「でなければ彼女の行動に説明がつくまい。ジュエルシードの真の危険性を知らず、集めたジュエルシードを使用する気配もなければその心算もなさそうだ。しかし集めることには必死・・・それでもない、背後に誰も居ないと考えるのはさすがに無理があるだろう」

「そうね、あなたの言う通りだね。けれど・・・」

「何かね？」

リンディは少し士郎の言い分に違和感を覚えた。

正確には士郎の態度というか気配に、なんとなくそう感じた。

そしてよく考えてみると、その違和感の正体がハッキリとしたそれは彼がまるで「自分がそう動くことを正当化しようとしている」ようだったからだ。

確かに士郎の言い分は正しい。

しかし、なにも「士郎でなければいけない理由がない」のだから。

「・・・本当の理由を教えて貰えないかしら？それならあた

なが態々動く必要はないんじゃないかしら？ 広域搜索では、あな
た一人でやるよりもこちらで搜索・調査した方が効率も良いと思う
けれど？」

「……やはり誤魔化しきれんか。……正直言つて
彼女のが気になる。彼女の目は……悲しみで満たされていた。
絶望に陥る一步手前といったところだろう。あのような目をした者
を、私は大勢見てきた。何が彼女をそこまで追い詰めたのか……
……可能ならば救いたいと思う」

士郎が気になったのは、なのはと同じくフェイトの目だ。
なのははあれを「とても悲しそうな目」程度にしか見ていないだろ
うが、士郎はそれを非常に危ういと感じていた。

ああいう絶望一步手前や絶望に染まった目をした者は、士郎の経験
上、悲惨な最期を遂げている。

彼女をそうさせない為に、何が年端も行かなぬ彼女をそこまで追い
詰めたのか原因を知りたかった。

そして、その原因を取り除いてあげたかったのだ。

「……それに」

「……それに？」

「なのはが彼女のことを心配している。なのはには、借りがある」

そう言いながら士郎はニツと笑ってみせる。

リンディは士郎の意見や理由を吟味する。

士郎の目は真剣そのものであり、少女を救いたいと思っていること
も、なのはに恩を返したいというのも本当であることが読み取れる。
それに、リンディには士郎は今までいくつもの事件を解決してきた

クロノよりも落ち着いており、歳に似合わぬ貫禄を感じさせ、油断のならない少年だということが分かっていても何故か安心して事を任せられるような気がしたのだ。

その理由は分からない。ただ、彼は裏切らない、彼は信頼できる、とリンディの勘が告げていた。

その勘を信じて士郎に任せてみることにした。

「……………わかりました、許可しましょう。こちらでも情報を集めておきます」

「艦長!!」

「助かる」

クロノはリンディに抗議の声をかけるが、士郎にもリンディにも無視される形となった。

「ただし、条件があります。これはあなたが申し出てきたことであり、潜入捜査において問題が起きても当方は一切関知しません。……………構いませんね？」

「当然だな。いいだろう。その代わり、私がない間なのは達を頼む」

士郎の”頼む”という言葉に重い響きを感じたリンディは頷いた。

「わかりました。クロノも、いいわね？」

「……………はあゝ、わかりました。艦長の決定事項なら異議はありません。抗議したとしても無駄でしょう……………それより、

君はいいのか？衛宮。僕達のことは信用ならないんじゃないかなかったのか？」

「確かに、最初はな。だが、僅か一晚の短い間ではあるが、君達と一緒にいて悪い人間ではないことは察せられる。いくらかの打算が働いているにしても、だ。それぐらいの人を見る目は養っているつもりだよ」

そう言つて士郎はリンディとクロノに背を向けて会議室を出ようとして、ふと思ひ出したように言つた。

「ああ、そうだ。通信機を貸して貰えるかね？ 万が一の時や情報を入手したらそれで連絡する……私はまだ上手く念話というものを使えないのでな……」

こうして士郎によるフェイト搜索と潜入捜査の許可が下りたのだつた。

もちろん士郎に任せるだけではなく、ジュエルシードの位置特定と平行してエイミイがフェイトに関する情報収集と搜索を行うのだが、その後、士郎はなのはとユーノにこのことを伝えて艦を搜索の為、一旦アースラを離れた。

アースラを出る前、転送ポート前でなのはは士郎に言つた。

『——フェイトちゃんをお願い……』

そこにはどんな想いが込められていたのだろうか。

それを考えると士郎は「あんな風に女の子にお願いされたら、断れないよな」、と思ひながら、転送された臨海公園からフェイトの搜索を開始した。

i n t e r l u d e

同時刻

遠見市 住宅街 高層マンション

遠見市のとある高層マンションの屋上で、フェイトとアルフはジュエルシードの搜索に出向こうとしていた。

「フェイト……本当に続けるのかい？」

「……………うん」

「……………」

アルフは複雑な心境だった。

本当なら今すぐにでもフェイトを連れて管理局からも、そして何よりあの”フェイトの母親を名乗る女”から逃げたかった。

しかし、フェイトはそれを望んでいない。

昨夜も必死に説得したが、彼女は聞き入れてくれなかった。

彼女は信じているのだ。この一件が片付けば、あの女が昔のように笑いかけてくれるのだと。優しく、慈愛に満ちたお母さんに戻ってくれるのだと。

ただただ、信じ続けている。

だがアルフにはそうは思えなかった。

あの女、プレシア・テストロッサはフェイトのことを一度も褒めたことがない。笑顔を向けたこともない。優しくしたこともない。食事すらも一緒に摂ったことがない。

魔法の教育も全て使い魔だったリニスに任せっきりだった。

そもそも、プレシアがフェイトに向ける目は母親のそれではない。まるで許せない、汚らしいものを見るような、仇を見るような、憎しみを秘めたとても冷たい目で見えるのだ。

——それにフェイトは気付いていない。……いや、気付かない振りをしている。

アルフにはそのフェイトの姿がとても痛ましく見えた。

それでも、アルフにはフェイトの望みを断ち切ってまで目的を実行することなど出来ない。

フェイトの絶望するところを見たくないから。

しかし、その代わりにフェイトの泣くのを堪えた表情を、悲しく寂しい姿をずっと見続けなければならない。

だから、昨夜誓ったのだ。

この少女を、脆くいつ壊れてしまうか分からない自分の主たる彼女を、必ず誰からも守り抜いて見せるのだと。

しかし、本音を言えば……。

そんな堂々巡り。答えの出ない迷路。

（——今あたしがすることは、フェイトを守ることだ。……それ以外は今は考えないようにしよう）

アルフは数回軽く頭を横に振り、同じことを繰り返し考えてしまう思考を振り払う。

アルフが自分の思考に漸く区切りをつけたところで、フェイトが言った。

「……………行こう」

「……………うん」

フェイトが飛行魔法を使って屋上から飛び立つ。
アルフもそれに続いて空中へとその身を躍らせた。

i n t e r l u d e o u t

4月30日 遠見市近郊

士郎はエイミイの海鳴市全域の探查網にフェイトたちが引っ掛かっていないことから、海鳴市内にはいないと推測していた。

そして現在は海鳴市周辺の街、特に海鳴市に隣接する中で一番大きな遠見市を中心に搜索していた。

木を隠すには森の中、だ。

士郎の経験則から、犯罪者、家出人などなど、その大半が大きな街を潜伏先に選んでいる。

幾つか例外はあるが、大抵の人間は人混みに紛れて追跡者の目を誤魔化そうとする。

また、大きな街になればなるほど人と人の繋がりは薄くなるので、田舎よりも断然隠れやすい。

フェイトたちにも同じことが言える。

フェイトたち魔導師は、士郎の世界の魔術師と同じように常に微弱ながらも魔力を残しながら移動・生活している。

その魔力の痕跡は人が多ければ多いほど薄れて、もし一般人の中に微弱でも魔力を持つ者がいればその魔力で上書きされて分かりにくくなってしまう。

広域探索ではその魔力を搜索しているので、人が多ければ隠れやすい、ということだ。

「・・・・・・・・」

士郎は魔力を探知する能力はほぼ皆無と言っていい。

昔に比べれば魔力探知の力は幾分か付いたものの、通常の魔術師に比べれば中の下といったところだろう。

故に、士郎の搜索方法は、昔ながらの聞き込みと魔力で強化した驚異的な視力による目視搜索である。

搜索を開始してから約1日半ほどを聞き込みに費やしたが、そのおかげでいくつか有力な情報を得ることが出来た。

ハッキリ言って、外国人が比較的多い海鳴市や遠見市でも、フェイトとアルフの姿は目立つ。

なにせとんでもない金髪の美少女が、オレンジ色の体毛で額に宝石のある大型犬（本当は狼だが）を連れているのだ。

これで目立たない方がおかしいだろう。

その目撃情報によって、士郎はフェイト達の潜伏先をある程度絞り込んでいた。

遠見市の北側に位置する、高層マンションやホテルが集中している地域だ。

士郎は聞き込みを継続しながらも、屋上などに移動してその地域を中心に目視搜索を続けていた。

「・・・・・・・・」

しかし、士郎の『鷹の目』をもってしても、町に溢れる人から特定の人間を捜し当てるのは至難の業だ。

（せめて少しは魔力を使ってくれさえすれば見つけられるのだが・・・・・・・・！）

士郎がそんなことを考えていたとき、士郎にでもわかるぐらいの巨

大な魔力を感知することができた。

それも自分の索敵している範囲を外れた所からだ。

士郎は巨大な魔力の方へと目を向ける。

場所は遠見市市街地からは随分と離れた森の中だ。距離的には現在の士郎がいる場所からは4〜5kmほど離れている。その時、アースラにいるエイミィから通信が入った。

『士郎君！』

「状況は？」

『今2ヶ所で同時にジュエルシードが発動しちゃってるんだよ！それでなのはちゃんたちはもう一つの方を現在対処中！士郎君の現在位置から北西へ4・7kmの地点にもう一つ発生源があるから、士郎君はそっちに向かってくれる？』

「ああ、それはこちらでも確認したが・・・もう一ヶ所？」

士郎は神経を研ぎ澄まして魔力反応を探る。

すると距離がかなり離れているために今までは分からなかったが、海鳴市の方角からも僅かに魔力の反応を感知した。本当に米粒ほどの小さい反応だ。エイミィに言われるまで気が付かなかっただろう。本来ならジュエルシードの膨大な魔力が発生しているのだろうが、距離があることと士郎自身の魔力探知能力が低いのでそうとしか感じられないのだ。

これがもう一つの地点のように、比較的近距离なら話は別なのだろうが。

「・・・了解した。だが、私にはジュエルシードの封印はできないぞ。クロノをこちらへ寄せないか？」

『ごめん、士郎君。なのはちゃんたちが担当してるジュエルシードの封印に梃子摺ってるみたいで、クロノ君はその応援に出ちゃったの。だからクロノ君たちが到着するまで、無理しないで時間を稼ぐことだけを優先して』

どうやら、なのは達の方は暫く前からそちらの方を対応していたようだ。

しかし、その封印に梃子摺っている上に、タイミング悪くこちらのジュエルシードも発動してしまい手が足りなくなってしまうているのだらう。

封印できない者に「こっちが終わるまで時間を稼げ」とまで言うからには、向こうは手一杯なのだろう。

仕方なく士郎はエイミイの指示通りに動くことにした。

なのは達のが少し心配ではあったが、あちらはクロノが支援している。問題はないだらう。

「やれやれ、無茶を言ってくれる。だが仕方あるまい、了解した。なのは達の方は任せたぞ。こちらは黒服の少女の搜索を中断して指示された場所に……」

士郎がそう言っでジュエルシードの所に向かおうとしたとき、その地点をすっぱり覆うように結界が展開された。

それはもちろん、なのはやクロノ達が張った結界ではない。

となればその結界を張れるのは彼女達しかいない。

そのことに考えが至った士郎は少し溜息を吐いた。

「やれやれ、先を越されたか……それに、今までのオレの努力は一体……」

そう呟きつつ、土郎は全速力で結界が発動している森へと向かった。

interlude

遠見市郊外

森の中ではアルフが結界を張って支援に徹し、フェイトがジュエルシードの覚醒体と戦闘を行っていた。

フェイトが相手にしているのは銀色の身体をした、巨大な蠍だ。全長はおよそ2mほどもあり、その体はまるで鋼鉄のように硬い。蠍が鋭利な刃物と化したその巨大な鎌状の前肢を振るう度に、フェイトがそれを持ち前の素早さで回避し、目標を外れた前肢は木々を切り倒す。

時折、フェイトがフォトンランサーを打ち込むが、硬い表皮に弾かれてしまう。

どうやら巨大蠍の体には、その並外れた強度の身体に加え、魔法的な防御能力が備わっているようだ。

加えて巨大蠍のパワーは侮れず、体の魔法効果と鋭利な前肢もあってアルフのバインドも引きちぎられてしまつて、あまり効果が見られない。精々が短時間の間、動きを鈍らせるくらいだ。

砲撃魔法を放とうにも相手の動きが見た目に反して素早く、なかなか砲撃体制が取れない。距離をとって砲撃をしようとしても、あの防御能力を突破するほどの砲撃ともなればそれなりに魔力充填をしなければならず、その間に接近を許してしまうだろう。

（このままじゃ……マズイ。時間がかかり過ぎる。……
早くしないと、管理局が……）

その余分な思考で、フェイトは意識を僅かに逸らしてしまった。

敵の攻撃を回避した直後の着地。その着地地点には木の根が露出しており、大きな石も側にあった。

意識が逸れていたフェイトはそのことに気が付かず、石を踏んで足首を捻り、つま先が僅かに木の根に引っ掛かってしまった。

突然の足首の痛みと動きのブレに、ただでさえ管理局のことを気にして焦っていたフェイトは、動揺から動きが止まってしまった。

そこへ迫る巨大蟪蛄の鎌。

「フェイト!!」

「!」

< D e f e . . . >

バルディッシュが咄嗟にバリアを展開しようとしたが間に合わない。フェイトはそれでも身を守ろうとバルディッシュを突き出すが、これも間に合わない。

フェイトはただ自分に迫る凶刃を受け入れるしかなかった。

——だが、4つの銀光が突如飛来し、鎌に当たり軌道をフェイトから逸らした。

その隙に我に帰ったフェイトは飛行魔法で離脱しようとする。

蟪蛄もそれを追うが、再び飛来した、今度は8つの銀光の直撃を受けて動きを鈍らせる。

8発の銀光を受けた部分の蟪蛄の体は、僅かではあるがへこんでいた。

そのおかげで、フェイトは無事にアルフの元まで後退できた。

フェイトは安全な場所で、一度こちらを見失ってうろうろしている蟪蛄を視界に入れたまま、先程の窮地を救ってくれた攻撃について

アルフに訊ねる。

「・・・アルフ、今のは・・・？」

「わかんないよ。急にどっから飛んできて・・・」

アルフが口籠った所に、突然声を掛けられた。

「どうやら間に合ったようだな。怪我はないかね？」

その声に慌ててそちらを向く2人。

視線の先には、白髪で褐色の肌をした少年が黒い洋弓を手に立っていた。

フェイトとアルフにはその少年に見覚えがあった。

ジュエルシードが発生させたと思われる空間の割れ目から現れ、そして先日も、あの白い魔導師の少女と共にいた少年だった。

i n t e r l u d e o u t

現場に到着した土郎の目に飛び込んできたものは、巨大な蠅螂と戦っているフェイトだった。

素早い動きでフェイトに肉薄し、その鋭利な鎌を振るう蠅螂を、フェイトはそれよりもさらに速く動いて回避する。

互いの攻撃は決め手に欠け、一種の膠着状態が出来上がっていた。しかし、その状況もフェイトが何かに気を取られてミスをしたことで、一気に蠅螂側に傾いた。

フェイトに迫る凶刃。

フェイトが体勢を崩したと同時に、土郎は弓と4本の鉄矢を投影し

て瞬時に狙いを定めて、放つ。

狙うは蠋螂の鎌。

マシンガンのように立て続けに放たれた4本の矢は、正確に鎌に命中し、その軌道を僅かに逸らす。

それを機とつたのかフェイトが即座に蠋螂から離れるのを確認すると、蠋螂の追撃を防ぐ為に今度は8本の矢を投影して打ち込む。

だが、蠋螂は攻撃によって追撃を中止し、頑丈そうな身体も何箇所かへこんでいたが、その固い表皮のお蔭が大したダメージはないようだった。

とはいえ、追撃を中止させただけでなく、蠋螂がフェイトたちを見失ったようなので成果としてはまあまあと言えるだろう。

そして、蠋螂から一旦距離をとったフェイトたちを見つけた士郎は、静かに近づいて声を掛けた。

「どうやら間に合ったようだな。怪我はないかね？」

声を掛けられた2人は驚いた様子でこちらを振り返る。

その表情には、驚きだけでなく困惑も浮かんでいた。

「あなたは・・・」

フェイトが言葉を続ける前に、アルフが動いた。

魔力弾を士郎に打ち込み、それと同時に一息で距離を詰めて近接戦闘に持ち込む。

アルフが近接戦闘を選択したのは、士郎が弓を手にしていたからだ。彼女はそれを遠距離系アウトレンジの射撃・砲撃を主体としたデバイスだと判断したのだ。

それに対して士郎は、瞬時に強化魔術を使って回避行動をとりながら弓の投影イメージを破棄。

イメージを失った弓は空中に霧散する。

そして、アルフの突きこんでくる魔法で強化された拳を、即座に投影した双剣、『干将・莫耶』をクロスさせて受け止める。

双剣に激突し、その後拮抗するアルフの拳。拳を止められたアルフも、そしてフェイトも、弓が消えて突如として双剣が現れたことに驚きを隠せなかった。

なにせ魔力の発露はあったものの、魔法を行使したにしては魔法陣が展開されなかったからだ。

当の士郎は2人の驚きなどに気付きもせず、突然のアルフの行動に困惑するでもなく、落ち着いた様子だった。

「ふむ。窮地を救ったと言うのに、いきなり何をする？」

士郎のその言葉に、アルフは動揺からすぐに立ち直ると、拳を突き出したまま噛み付くように言った。

「・・・何をしに来た！ この管理局の人間が！！」

「?・・・ああ、なるほど。そういうことか」

士郎は双剣を力任せに押し出し、アルフを弾き返す。

そして、アルフが着地して再び攻撃を仕掛ける前に言った。

「確かに、私が管理局側の勢力に組していることは否定しないが、私は管理局の人間ではないよ。・・・それに、いいのかね？」

当初の目標をそのままにしておいて？」

その言葉に、一瞬キョトンとしたアルフとフェイトだが、その意味を察すると先程まで螳螂がいた背後を振り向く。

振り向いた先には、再び自分たちを発見して接近してくる螳螂がいた。

すぐさま蠋螂に対処しようとする2人だが、それよりも速く、2人の横を士郎が蠋螂に向かって走り抜ける。

そしてそのまま、蠋螂が振るった鎌を双剣で受け流す。

上下左右、ありとあらゆる方向から縦横無尽に繰り出される鎌。

それを士郎はしっかりと『視』て確実に軌道を逸らす。

フェイトとアルフはその光景に呆然としていた。

自分たちでは回避や防御をするのでやっとだった攻撃を、魔法らしきものを殆ど使わずに双剣のみで捌き切っている士郎を信じられな
いと言う目で見ていた。

その士郎が鎌の攻撃を捌きながら言った。

「・・・何をボサツとしている。私がこいつを食い止めている間に、さっさと封印したまえ」

そう言うのと士郎は、蠋螂との戦闘に再び意識を戻す。

言われたフェイトとアルフは我に返り、すぐに封印の準備をする。

フェイトはバルディッシュをシーリングフォームに切り替えて砲撃の魔力充填を。アルフは補助魔法を組み上げてフェイトを補佐する。全ての準備が整ったところで、フェイトが士郎に告げた。

「・・・準備、整いました。・・・いつでも撃てます」

「承知した。私の方で隙を作る。後はそちらのタイミングで撃て」

「・・・わかりました」

士郎の言葉に頷くと、フェイトは砲撃のタイミングを見計らう。

士郎は蠋螂の攻撃を捌きつつ、フェイトが砲撃しやすいように相手の体制を崩せるところを探す。

そして、その隙はすぐに訪れた。

士郎が今まで受け流してした攻撃を、タイミングを外すために態と双剣で受け止め、一度押し返してから引く。

それによって体勢を崩した蠍の下へ潜り込み、全身の強化されたバネと筋力を使って思いつき双剣で下から搗ち上げる。

そして頭を打ち上げられた蠍を、士郎はさらに跳躍して再び下から切り上げた。

それによって蠍の6本の足のうち2本しか地面についておらず、蠍はその軟らかい腹を曝け出すことになった。

それを見逃すフェイトではない。

「サンダー・・・スマッシュャー!!」

号令と共に放たれる砲撃。

同時に蠍から離れる士郎。

本来、サンダースマッシュャーはデバイスフォームのときに使われるものだが、魔法効果のある頑丈な表皮を突破する為とジュエルシードの封印を行う上で、シーリングフォームはある一つの魔法に魔力をすべて向けることに優れている。その為に、あえてシーリングフォームを選択したのだった。

その全ての魔力を注ぎ込まれた砲撃は、多少の抵抗は受けたものの、いとも容易く表皮を突破してジュエルシードを封印した。

ジュエルシードが封印されたことで蠍は元の大きさに戻り、そのまま茂みの中へ消えていった。

空中に浮かんだままのジュエルシード。

しかし、フェイトもアルフも戦闘体勢のまま士郎を睨み据え、ジュエルシードを回収しようとはしなかった。

それを見た士郎は、溜息を吐きつつ投影していた武器を破棄して徒手空拳になる。

訝しむ2人。

その間に士郎はスッと何気ない動作で素早くジュエルシードに近づ

き、手に取った。

その行動にフェイトは緊張し、アルフは今に襲い掛かろうとその鋭い犬歯を剥き出しにする。

だが、士郎は

「受け取れ」

そう言って手にしたジュエルシードをフェイト目掛けて軽く放り投げた。

またしても士郎の行動にフェイトも、敵意を剥き出しにしていたアルフもキョトンとしてしまった。

投げられ、放物線を描きながら近づいてくるジュエルシード。

それを見たフェイトは我に返り、慌ててバルディッシュを待機状態に戻して両手でジュエルシードを受け止めようとする。

その受け取るときの動きは、咄嗟の為かジュエルシードをキャッチしようとして上を見上げてオドオドしていて、歳相応の愛嬌があった。

そしてしっかりと両手でジュエルシードをキャッチしたフェイトはすぐに手を開いてジュエルシードを確認し、ホッと軽く息を吐いた。しかしすぐに表情を引き締めると、士郎に尋ねる。

「・・・どういふつもりですか？」

「どう、とは？」

「なぜ敵である私たちにジュエルシードを渡したんですか？」

「敵？ 私は君達の敵になつたつもりはないがな」

「——っ！とぼけるんじゃないよっ、この管理局の狗め！」

「とぼけてなどいないさ。私は君達の敵ではないし、管理局の狗でもない」

「この「——待つて、アルフ」………フェイト………」

フェイトがアルフを宥め、一歩士郎に近づく。

ただし、それは話し合いをする為ではない。デバイスを構え、魔力の充填をしながら威嚇する為だ。

フェイトは、その赤い宝石のように綺麗な瞳で、士郎を睨みつける。それに対して士郎は、余裕の笑みを浮かべている。

「もう一度訊きます。なぜ、私たちにジュエルシードを？」

「なに、ちよつとした条件を飲んで欲しいだけだ」

「………条件？」

「ああ。君達と行動を共にさせてくれればいい」

「「!？」」

士郎の出した条件に驚く二人。

当然だろう。正面きつて敵対しているわけではないが、仮にも敵対している側についている人間が同行させると言っているのだ。はつきり言つて信用できる筈がない。

「……その条件は飲めません」

「ふむ、大体予想は付くがあえて聞こう。何故かね？」

「あなたは管理局の職員ではないにしろ、管理局との関わりを持っています。そしてあの白い子とも。私たちはその両方と敵対しています。なのに、管理局やあの子に情報を流すかもしれない、何時敵になるかもしれない人とリスクを背負ってまで行動を共にする理由はありません」

「ふむ、道理だな。しかし、いずれにしても君達は私と行動を共にするしかないのだよ」

「——？それはどういう・・・」

すると士郎は再びその手に双剣を表し、右手に持った陽剣干将を一度大きく振り、フェイトたちに突きつける。

その行動でフェイトたちに緊張が走る。

士郎はあえて少しだけ殺気を含んだ声で話した。

「今ここで私の同行を拒否すれば、剣を交えるまでだ。——管理局に捕捉され、包囲されるリスクを負いながら」

「！」

「選べ、黒き魔導師よ。今ここで管理局に追いつかれるか、私が裏切るか否かに賭けるか。——急いだ方がいいぞ。管理局はすぐそこまで迫ってきているのだから」

本当は士郎としてもこのような脅迫じみたやり方はあまりしたくない。

しかし、この機を逃すともう彼女達と話すことができないかもしれない。

隠れ家を見つけて会いに行ったりとしても、拒絶され戦闘になるだけ

だろう。

今ここで説得しようとしても同じことだ。

ならば、多少強引でも彼女達との接点を持ち続けることが、今は重要と考えたのだ。

「・・・・・・・・」

一方、奥歯を噛み締め、必死に状況を打開しようと思考するフェイト。

だが、どちらにしてもフェイトはリスクを負う事になる。

沈黙し、必死に考えているフェイトを心配そうに見ていたアルフだったが、いい加減に我慢できなくなったのか士郎を睨みつけながらフェイトに言った。

「簡単だよフェイト。このふざけた坊主をコテンパンにして、さっさと逃げればいいんだよ！」

「ダメだよ、アルフ・・・」

「なんで——」

「彼と戦うことになれば、それだけ時間がなくなる。ただでさえ、あの虫を倒すのに時間がかかったのにこれ以上ここにいるのは危険だよ」

「こんなやつすぐに・・・！」

フェイトの言葉に反論しようとしたアルフだったが、フェイトは静かに首を振って否定した。

確かに、一見すれば二人掛りで戦えば短時間で倒せるかもしれない。

しかし、それでも貴重な時間を浪費することには変わりない。
加えて、先程の士郎と蠅螂の戦いを見ていた限り、彼を倒すのは容易ではないと分かる。

彼は防御が上手い。そして戦い慣れている上に、剣の腕前も相当のものだと分かる。

恐らく、全力で戦ったとしても管理局が到着するまでには倒せないだろう。

仮に倒せたとしても、こちらは無傷とはいかないだろう。

その後、管理局から逃げる、或いは戦って逃げる機会を窺うだけの余力が残っているかどうか問題になる。

フェイトの無言の否定に、なんとなくそのことを感じ取ったアルフは悔しそうに歯噛みした。

その後も暫らく黙考していたフェイトだったが、意を決したように口を開いた。

「……………分かりました。あなたの条件をのみます」

「フェイト！」

「話が早くて助かるよ、お嬢さん。それではすぐに移動しよう。君たちが管理局に捕まっては、私も困るのでな」

「「??」」

「なに、気にするな。こちらの話した」

その後、フェイトたちに付いてその場を去った士郎。

逃走中に痕跡を残すのは流石にまずいと思ったのか、フェイトも比較的好戦的なアルフも、士郎に何も仕掛けてこなかった。

こうして、士郎は無事(?)にフェイトとの接触に成功したのだ

った。

ちなみに。

通信機と通信機に内蔵された発信機の電源を落としておいたのは言うまでもない。

もつとも、このことが原因で、後にアースラに戻ったときにクロノから延々と文句を聞かされる羽目になるのだが・・・。

1章5節 運命という名の少女 後編

4月30日 遠見市 高層マンション

遠見市の北側に、住宅地やマンションやホテル、その他賃貸物件が数多く存在する地域がある。

士郎がフェイトたちを搜索するに当たって、特に重点的に搜索していた地域でもある。

そして士郎の読み通り、フェイト達の現地拠点となっている高層マンションもその地域内に存在した。

つい先程、士郎はフェイトたちと共に先の戦闘があつた地域を脱出した。

その後、魔法などで追跡をできないように攪乱しながらこの地域へとやってきた。

そして今まさにそのフェイトの住んでいる部屋まで彼女とアルフに付いて来た訳だが、部屋に入室した直後、複数のバインドで身体を縛られて簀巻き状態にされ、床に転がされていた。

「……………なんか、あっさり捕まえられたから拍子抜けだねえ」

「……………そうだね……………」

とはいえ、士郎も本当に隙を突かれて拘束されたわけではない。

ここで抵抗すれば、フェイトとアルフに対して敵対する意思があると彼女達は考えるだろう。

それを考慮してワザと拘束されたのだった。

しかし、今の状況を見てみると、フェイトたちはあまりにもあっさりとして士郎を拘束できたことに困惑を隠しきれずにいる。

そして士郎もまた、ワザと捕まったとはいえ自分の無様な姿を女性二人に直視されていることが無性に恥ずかしかったりした。無論、表情に出したりはしないが・・・。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

結果として暫らく沈黙が続いたのだった。

やがて士郎が気恥ずかしさに屈し、居た堪れなくなつて2人に声を掛けた。

「・・・・・・・・いい加減、尋問するなり何なりしてもらいたいのが・・・・・・・・」

「そ、そうだね」

フェイトは一度咳払いして、意識を真面目モードに切り替えた。そして床に転がったままの士郎にバルディッシュを突き付ける。

「では訊きます。あなたの目的は何ですか？」

「ふむ。・・・・・・・・ここではぐらかしたら後が怖そうだな」

士郎はそう言つて腹筋と背筋だけで身体を起こし、簀巻きにされたまま床に座る格好となつた。

「簡単に言えば、恩返しだ」

「恩・・・返し？」

「ああ。私が大怪我をして空間の裂け目から出てきたのを、君達も見たのだろう？」

「……はい……」

「その後、私は君の言う『白い子』、高町なのはとフェレットモドキのユーノ・スクライアによってなのはの自宅に運ばれ、傷の手当を受けた。そしてこの世界が如何なる場所かなどを教えてもらった。故に、なのはとユーノは私にとって恩人なのだ。傷の手当をしてくれて、そのうえ異世界に放り出されて右も左も分からない私に、色々教えてくれたのだからな」

「……それと私たちと、何の関係が？」

「彼女が、なのはが君と話したがっている。可能なら戦いやジュエルシードのことを抜きでだ。しかし、現状それは不可能だ。だから私が代わりに君の話を聞きにきたのだよ。そして可能なら説得しに来た。『武力が伴っても構わない。ジュエルシードの問題が絡んでも構わない。なのはと真正面から話し合える機会を設けて欲しい』、とね」

士郎は真剣な眼差しでフェイトを見ながら、自分の僅かな願いも込めてそう言った。

しかし、士郎の話を聞いてフェイトは少し逡巡するように目を逸らしたものの、再び士郎のほうを向いたときに出てきたのは拒絶の言葉だった。

「それは……できません。私と彼女は同じジュエルシードを奪い合う敵同士です。話など……できません……」

「そうか。・・・ではせめてここにいる私にだけでもいい。君がジュエルシードを求める目的を教えて欲しい」

「目的・・・・・・・・」

「あるのだろうか？ 君にも、ジュエルシードの力を使ってでも叶えたい望みが」

「・・・・・・・・それは・・・・・・・・」

迷いを見せるフェイトだが、ここでも横からアルフが口を出してフェイトに「こんな怪しいヤツに話さなくていい」と言っ、彼女が答えを言うのを遮ってしまった。

その後、士郎はトイレ以外はずっとバインドで全身簀巻き状態にされたままだった。

監視はフェイトとアルフが交互に行っていた。

その間もう一方は管理局が士郎の通報で、或いは彼を追跡して自分達の拠点に来るのではないかと周囲の警戒に当たっていた。

彼女達は時折、態と監視を解き、士郎がバインドを破って逃げ出したりといった怪しい行動を取らないかどうかを試したりもした。

しかし、士郎は一向にそのような素振りは見せなかった。

そして、何時まで経っても管理局の人間が現れる気配もなく、そのまま1日が過ぎ去ろうとしていた。

5月1日

昼を大分過ぎた頃。昨日のジュエルシード捕獲場所からそう遠くな

い場所で、再びジュエルシードが発動した。

フェイトとアルフは1日経っても管理局が現れる気配すらないことから、士郎は管理局の人間や協力者ではない、少なくともそういった関係は薄いものと判断。

一時士郎の監視を解き、バインドはそのまま彼を部屋に放置したままジュエルシードの発動場所へと急行した。

その間、士郎は。

「……………流石に1日も何も食べないと腹が減るな……………」

「

そんな愚痴を零していた。

あの無様な格好のまま1日だ。愚痴も零したくもなる。

しかし、食事のことで士郎はふと思いついたことがあった。

昨夜のことだ。

アルフが冷凍食品のあり合わせのような料理を持って、自分を監視していたフェイトの元へ持ってきたのだ。

それをフェイトは料理を目の前にして断っていた。

最初はフェイトが自分を監視する間に隙を見せないようにと気を張っている所為かと思ったが、何も食事時までフェイトが監視しなければいけないわけではない。交代すればいいだけだ。

しかしフェイトは頑なに食事を摂らなかった。

話を聞いている限り、その日に限らず以前から食事を摂らないことが度々あったようだ。

食べたとしても、それは微々たる量に過ぎず、アルフも非常に心配していた。

士郎も部外者と分かっているながら食事は摂るように忠告したが、アルフからは黙っていると威嚇され、フェイトも首を縦に振らなかった。

「育ち盛りの年頃に、あのような食事ではダメだな」

フェイトが食事を摂らないのも問題だが、アルフが持ってきた冷凍食品尽くしの食事にもかなり問題がある。

士郎にはそれが我慢ならなかった。

食事を摂らない、或いは添加物などが多いインスタント・冷凍食品の類は子供の本来の成長を阻害するだけでなく、生活習慣病などの病気や体調不良の原因にもなる。

それを看過する訳にはいかない。

思い立ったら即行動に移すのみ。

士郎はフェイト達にちゃんとした食生活を送らせるという一点のみ、バインドからの脱走を決意した。

しかし、いくら力を入れてみてもバインドはびくともしない。

強化魔術で筋力を上げ、引きちぎろうとも考えたが、それは反動が大きすぎるので却下した。

試行錯誤の末、最終的に魔力供給を断ち切ることのできる『宝具』を頭上に投影して、それを落下させることでバインドを切断した。その時、危つく背中と手を投影した武器で串刺しにしそうになったのは秘密だ。

バインドから開放された士郎の最初の行動は冷蔵庫と台所のチェックだ。

台所は立派なシステムキッチンで、調理器具も大半が揃っていた。

普通に料理をする分には問題ないだろう。

問題だったのは冷蔵庫の方だ。

こちらはハッキリ言って何も入っていないかった。

栄養ドリンクや冷凍食品はあったものの、士郎の求める『食材』はなかった。

そこで外へ買い物に行こうとしたのだが、ふとこの世界の通貨を持つていないことに気が付いた。

しばらく悩んだ士郎だったが、止むを得ず通信機でエイミィとリン

ディ艦長を呼び出してこの世界の通貨を用意してくれるように頼んだ。

リンディ達は、まさか既に士郎がフェイト達の隠れ家を発見してそこにいるとは露ほども思っておらず、ただ通信機の電源が切れていて先の戦闘後に全く連絡が取れなかったので心配していたようだ。士郎は彼女達に悪いとは思いつつも、フェイト達の搜索にこの世界の通貨が必要であることを伝え、用意してくれるように交渉した結果、あっさりと要請は通り、士郎の指定した場所で局員と接触して通貨の入手に成功したのだった。

局員と別れた後、局員やサーチャーによる監視及び追跡がないかどうかを警戒しつつ食材を買出し、その後フェイト達の隠れ家に戻った。

隠れ家に戻ったとき、まだフェイトたちは帰ってきていなかった。

（もしかしたら、先程のジュエルシードの発生場所に向かった後に別の場所を搜索しているのかもしれないな・・・）

そうなれば、恐らく彼女達は疲れて帰ってくる筈だ。

そんな彼女達のために最大の持て成しをしようと、士郎は料理に取り掛かった。

そして士郎が隠れ家に戻ってから約3時間半後。

日が沈んで少しした頃にフェイトたちが帰ってきた。

ジュエルシードの発動を感知し、士郎を放置したまま発動地点へと急行したフェイトとアルフだったが、既に現場にはなのは達が到着して封印を開始していた。

今までなら強引にでも割り込んで奪取しているところだが、今彼女のバックには管理局が付いている。

現場やその周囲にもサーチャーなどが展開されていることはほぼ確実だった。

故にある一定以上の距離からは近づけず、結果としてジュエルシードがなのは達の手渡るのを指をくわえて見ているしかなかった。その後、なのは達が立ち去ってからその場を離れ、手ぶらで帰るわけにもいかなかったので外に出たついでに別の場所を搜索した。

しかし、努力の甲斐なく、こちらでもジュエルシードを発見することはできなかった。

そして間もなく日没という時間になってから、隠れ家として利用している土郎を放置したままのマンションへと帰還してきた。

もちろん帰還の際は管理局の追跡や待ち伏せなどがないかなど、十分警戒していた。

そして無事にマンションの自分達の部屋の前まで帰ってきたところで、フェイトとアルフはふと違和感を感じた。

出て行ったのは昼前なので、室内の電気は点けていなかったはずだ。しかし、廊下に面した窓からは光が漏れている。

それだけではない。

台所に通じている換気扇が動いているらしく、廊下の排気口から何やらいい匂いが温かい風とともに吐き出されていた。

——管理局の待ち伏せ・・・！

二人はそう判断した。

フェイトとアルフは顔を見合わせると、フェイトはデバイスを起動し、アルフは人間形態へと変身した。

そして素早く周囲を索敵したが、武装局員などが潜伏している様子はない。

となれば少数精鋭部隊なのか。

フェイトの頭には白いバリアジャケットの少女と、黒い戦闘服の執務官、そしてあの白髪で褐色の肌の少年の姿が浮かんでいた。

フェイトは直ぐに状況を分析する。

（ここまで近づいちゃったら、ただ逃げるだけなら追いつかれる・・・それなら）

一撃離脱。

それしかない。

室内に突入し、狭い室内での許容できる範囲内で最大威力の魔法を発動させ、敵が混乱している間にジャミングで攪乱しながら離脱する。

相手もこのような狭い空間で高威力の魔法を使ってくるとは予想していない筈。

だからこの作戦が成功する確率が高い筈だとフェイトは考えていた。直ぐにアルフに作戦を知らせ、同意を求める。

アルフも派手にやろう！と乗り気だった。

そして2人で息を合わせ、ドアの鍵を開けて室内に突入した。

そこでフェイトたちが目にしたものは・・・！！

—— 士郎がエプロン姿でテーブルに料理を並べている光景だった。

「・・・・・・は？・・・・・・」

士郎のかなり予想外の服装と状況に呆けるフェイトとアルフ。

それを士郎は何気なく迎え入れる。

「ふむ、遅かったな2人とも。だが丁度いいところに帰ってきた。今、出来上がったばかりだから、冷めないうちに食べてくれ」

そう言つて士郎は一度台所へ引つ込むと、また別の料理や食器を運んできてテーブルに並べる。

その間、フェイトとアルフは固まったままだった。

その時間、約5分。

そしてテーブルに全てを並べ終えた士郎が、未だに固まったままの2人に席に着くように促す。

「何をそんな所で固まっている？ 早く席に着きたまえ。せつかくの料理が冷めてしまうぞ？」

士郎がそう言いながら席に着いたので、フェイトとアルフも釣られて座りそうになったが、ハタとこの状況に流されている自分たちを漸く認識できた。

「——ちよ、ちよっと待った~~~~!!」

「何だどうした？ 食事を前に騒がしいぞ」

「……これは、どういう状況なんですか？」

「ん？ 見ての通り夕食——」

その言葉を士郎は最後まで言い切れなかった。

フェイトがデバイスを、アルフがその拳を突きつけてきたからだ。

しかし、フェイト達も未だに状況を把握できてはおらず、混乱した

まだ。

それでも正気に戻って直ぐに室内と周囲を索敵したが、管理局の人間の反応はまったくない。

そう、目の前にいる未だにエプロンをしたままの、本来ならば今もバインドで拘束されたままのはずの士郎を除いては。

「……何のつもりですか、これは？ 私たちを油断させる為の罠ですか？」

「そのようなつもりは毛頭ないよ。ただ、君が昨日食事を摂っていなかったのね。気を利かせて用意したつもりなのだが？……・ああ、心配しなくとも、君達の事を管理局に通報してはいない。言わなかったかな？ 私が協力しているのはあくまでなのはだけだと」

士郎の目を、真っ直ぐに見据えて真意を測ろうとするが、フェイトが感じたのは「この少年は嘘を吐いていない」という根拠のない確信だけだった。

「では、どうやってバインドを抜け出したんですか？」

「それを話すのは構わないが……早くしないと料理が冷めてしまう。食べながらで構わないだろう？」

そう言って士郎は再び席についてしまった。

そして士郎は無言で、目で2人に「席に着け」と促した。

しかし、フェイトとアルフはこの特異な状況もさることながら、士郎を必要以上に警戒してしまっていた。

士郎はそんな彼女と、少し自分の迂闊な行動に嘆息しつつ言葉を発した。

「・・・安心したまえ。毒や睡眠薬、痺れ薬といった類は入っていない。そんなことをしたら、食べ物への冒涇だよ」

「・・・・・・・・」

士郎の言葉にどれほどの力があつたのか。

それともフェイトとアルフ自身、これは罠の可能性が低いと判断したのか。

2人ともデバイスと拳を下ろし、席に着いた。

しかし、席に着けばあとは士郎の目論見通りだ。

いや、部屋に入った段階で、既にフェイトとアルフは士郎の術中に囚われていた。

ここ数日まともに食事を摂っていないフェイトはもちろん、素体が狼で鼻の利くアルフも目の前の色とりどりの料理を目の前にし、そのうえその料理の数々から漂う空腹感を誘ういい香りに、2人とも三大欲求のひとつである食欲を刺激されまくりだった。

料理を目の前にした2人からは、既に士郎に対する疑念や不信任は忘却されていた・・・。

そして、士郎は最後の仕上げに取り掛かった。

「それでは・・・いただきます」

「——い、いただきます・・・・・・・・」

手本とばかりに士郎が真つ先に両手を合わせ、いわゆる「いただきます」をしたのだ。

それに釣られた2人も同じように「いただきます」をして手を料理へと伸ばした。

そしてフェイトはフォークで絡め取ったスパゲッティを、アルフは

こんがりと焼き上げられたチキンを手に取り、恐る恐る口へと運んだ。

そして口へ運んだ瞬間、2人は驚愕した。

「・・・・・・・・とつても・・・・・・・・おいしい・・・・・・・・」

「何これ・・・！めちゃくちゃおいしいよー！」

その後は言わずもがな。

アルフは次々とチキンなどの肉を中心に口いっぱい頬張り、フェイトも小さい口を懸命に動かしながら並べられた料理を次々と平らげていった。

士郎はそんな2人の姿に、彼女達に気付かれぬように薄っすらと微笑み、自らも食事を開始した。

暫らく後。

テーブルの上にある食器には、何ものつていなかった。
つまりが完食である。

「いやゝ。ホント、めちゃくちゃ美味かったよ」

「うん、そうだね。私もこんなに食べたのは、久しぶりかな」

腹の底から癒されるような満腹感と、美味かった料理の味を思い出しながら自然と口が軽くなるフェイトとアルフ。
それを、士郎は静かに聞いていた。

「さっきの料理。リナスが作ってくれたものよりおいしかったかも・

・・」

「そうだね。今までに食べたことないってぐらい美味かった」

「リニスとは、どんな人物なのだ？」

「リニスは母さんの使い魔で、私とアルフの教育係だったんだ。厳しいところもあったけど、凄く優しく、作ってくれる料理もおいしくて、私にバルディシュも作ってくれて。・・・・今はもういないけど、私もアルフも大好きだった」

「そうか・・・。リニスのマスター・・・君の母親は、どんな人物なのだ？」

「母さんは・・・・昔は優しくったんだけど、今は研究にかかりっきりで凄く疲れているみたい・・・・。厳しくて怖いところもあるけど、それは研究に行き詰っているせいだから・・・・」

「

リニスのことを話すフェイトは、穏やかな表情で、懐かしい思い出を振り返っているようだった。

しかし、母親のことを話すフェイトは、リニスのことを話すときよりも明らかに表情が沈んでいた。

士郎はそのことに少し眉を顰めながらも、静かにフェイトの話に耳を傾けていた。

「・・・・だから私は、ジュエルシードを早く集めて母さんの研究を完成させるんだ・・・・。そうすれば・・・・。母さんはきっと、昔みたいに笑ってくれる・・・・。」

「それが君がジュエルシードを集める目的か」

士郎はようやく合点がいった。

つまりフェイトは母親に強要されてジュエルシードを集めているのだらうと分かったからだ。

フェイトが悲しい、暗い目をしているのはその母親が変わってしまった事によるものは、まだ分からなかったが。

しかし、彼女の目に宿された悲しみはそれだけとは思えない。

フェイトがさつき話したこと以外にもその理由があるのか、それともフェイトが控えめに話をしたか。

いずれにしても今回のキーポイントになってくるのはその母親だ。

フェイトの年齢からしてみれば母親と言う存在は極めて重要だ。

その母親次第で、子供の置かれた状況は良くも悪くもなる。

そして、今のフェイトは明らかに悪い方向に進んでいることは確かだ。

しかし、まだ情報が不足している為に、解決策はもちろんフェイトの置かれた詳しい状況もぼやけたままだ。

そうやって士郎が思考に没している間に、食事のときの雰囲気が段々と薄れ始め、フェイトもアルフも段々と正気(?)に戻り始めていた。

そして、ついうつかりリリスや母親のことを話してしまったことを知る。

そして最初に噛み付いたのは、もちろんアルフだった。

「アンタ・・・！ よくも嵌めてくれたね！！」

「嵌めた？ 人聞きの悪い。君たちが状況に流されただけだらう？」

「この・・・！」

「それに。未だに管理局が現れず、食事にも薬物の類は混入していなかった。この状況で、君はまだ私が敵だと断言できるのかね？」

「む・・・・・・・・・・」

「君はどうだ、黒き魔導師よ・・・？」

「・・・・・・・・・・確かに、敵と断言するにはおかしい所が多いことも事実です・・・・・・・・・・事実、この状況でも管理局は現れず、連絡を取っているそぶりもない・・・・・・・・・・私自身、あなたが私たちを欺いているとは思えません・・・・・・・・・・それに」

「それに？」

「・・・・・・・・・・敵の拠点で無防備に料理を作って、一緒に食事までするなんて・・・・・・・・・・よほどの、その・・・・・・・・・・おバカさんが、敵ではないかのどちらかしか考えられません・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・お、おバカさん・・・・・・・・・・」

何気にフェイトにおバカさんと評されたのにショックを受けた土郎だったが、少なくとも敵と言うカテゴリに入れられなかっただけマシだろうと前向きに考えることにした。

「・・・・・・・・・・それでは？」

「まだあなたを完全に信用したわけではありません・・・・・・・・・・管理局の側についていることは、あなた自身公言していた筈です。今は、少なくとも当面の敵にはならない、と判断しただけです。依然、あなたが警戒の対象であることには変わりはありません」

フェイトとしては脅迫されて仕方なく士郎をここまで連れてきたわけだが、連れて来てしまった以上、自分達の目の届かないところに行かれて管理局に拠点を通報されると非常に困るのだ。

しかし、実際に士郎と話したりすることでフェイト自身、理由の分からぬ安心感というかそういったものを感じたのだ。

『彼は信用できる』。そんな根拠のない確信が、フェイトにはあった。

故に彼女は、士郎を拘束することはせず、彼を泳がせて見ようと考えたのだった。

それは事実上、フェイトが士郎を受け入れるということに等しかった。

そのことに士郎は少し安堵し、依然警戒はすると明言されたものの、一先ず一歩前進することができたのだった。

「ふむ、それで構わんよ。私は、ただ君達から話を聞きたいだけだからな。敵対するつもりは毛頭ない」

士郎はそういうと席から立ち上がり、フェイトに向かって手を差し出したのだった。

「・・・？」

「なに、これから暫らくは一緒に行動するのだ。握手くらい、構わんだろう？」

暫らく士郎の差し出された手を見ていたフェイトだったが、おずおずと自分の手を差し出して握手をした。

初めて触る男の手の大きさと暖かさに一瞬ドキッとしたフェイトだった。

その後、アルフにも握手を求めた士郎だったが、彼女から「あたしは認めないよ!」といって拒絶されてしまった。そのことに対して、士郎は苦笑しただけだった。

その後、疲れを取るには風呂に入ることと寝ることが一番と言って、士郎は2人に入浴を促した。

そして満腹感のおかげか、ここ最近の疲れの蓄積を感じたフェイトとアルフは、交代で士郎を監視しつつ入浴することにした。

最初がフェイトで次がアルフ。最後に士郎という順番になった。士郎が入浴するときは脱衣所の外でアルフが監視を受け持つことになった。

そして2番目のアルフが風呂から上がってきたときだった。

「いやゝ、いい湯だったよ。こんなにゆっくりお風呂入ったの、あの時の温泉以来だよ」

「よかったね、アルフ。……じゃあ、次はあなたです」

「ああ、私も少々疲れたのでね。ゆっくり入らせてもらおう」

士郎が風呂場に行こうと立ち上がる。

そしてフェイトもアルフと共に士郎を風呂場まで監視に行こうとした。

「いいよフェイト。こいつの監視はあたしがやるから、フェイトはゆっくりしてて」

「ううん。お風呂の外で待つだけじゃ不十分だよ。私が探知と通信妨害の術式を展開するよ」

「でも、フェイト・・・」

「万が一の用心だけだから、大丈夫だよ」

そう言つてフェイトが2人の前を歩こうとする。

ちなみにフェイトは、肩を露出したシャツを着ている。

男を前に、無防備すぎるだろうと士郎は思ったが、彼女のバリアジャケット姿を思い出してなんとなく納得してしまった。

（まあ、それはどうでもいいか・・・）

そう士郎が思つたときだった。

ふとフェイトの露出した肩の後ろ側から背中に掛けて、赤い筋のようなものが走っているのが見えた。

今までのバリアジャケット姿や普段着では気付かなかったものだ。士郎はその赤い筋が気になり、フェイトの腕を掴んで引き寄せてよく確認してみる。

さらに、赤い筋の全体を確認する為に、フェイトの着ているシャツを肩口の部分をめくつて見る。

「わっ・・・！」

「——あ、あんた！ フェイトに何するんだい！！」

突然の士郎の行動に引き寄せられたフェイトは驚き、シャツをずらされて素肌の背中を見られたことを悟ると顔を真っ赤にした。そしてそれを見たアルフは怒声を上げながら士郎に掴みかかろうとする。

しかし、そんな周りの情報は士郎の頭には入ってこなかった。例の赤い筋を凝視する士郎。

肩口から見たものは1本だけだったが、少しめくったシャツから覗く背中には極狭い範囲であるのに対し、同じような赤い筋がいくつも奔っていた。

一見するとただの蚯蚓腫れのようにも見えるが、今は塞がっているが蚯蚓腫れに沿ってところどころ皮膚が裂けた痕がある。

そしてその筋は直線だけでなく、片方の先端が緩やかな、或いは急激な弧を描いて短く途切れている場所がある。

中には筋そのものが緩い弧を描いているものもある。

（……………これは……………鞭によってできた傷だ……………！）

そう。それらの特徴は、赤い筋が鞭によって付けられた傷であることを示していた。

士郎はフェイトの身体に付けられた傷が鞭でできたものだと知って、一瞬感情が沸騰しそうになった。

その気配を察したのか、フェイトもアルフも文句も言うことができずに息をのんでいた。

傷は殆ど表面が塞がっており、普段は薄まってしまつてよく見えない。

しかし、風呂に入つて体が温まり、血行がよくなることで残った皮膚下の傷が赤く浮き出てきたのだった。

昨日の戦闘では敵の攻撃手段は鞭ではなく鎌だった。

なのは話を聞いている限り、フェイトは鞭やそれに類する攻撃手段を持っている敵とは戦ったことはない筈だ。

もちろん、なのはのいないところでそのような敵と戦ったことは否定できないし、今日そのような敵と戦ったのも否定できない。

しかし、この傷は少し前にできたものだ。

加えて、動きの素早いフェイトがこの傷の回数分、敵の攻撃をその身に受けたとは考えにくい。

だが・・・夕食のときのフェイトの話しや様子から、ある一つの可能性が士郎の頭を過ぎった。

(・・・・・・・・まさか・・・・・・・・)

その考えが浮かんだとき、士郎は否定したかった。

しかし、現状ではその発想しか浮かんでこなかったのだ。

士郎は、それが外れていることを願いながら、感情を可能な限り押さえ込んでフェイトたちに訊いた。

「・・・・・・・・誰だ・・・・・・・・？」

「「え？」」

「・・・・・・・・誰にやられた・・・・・・・・？」

「な、何が・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・この傷は、誰に付けられたものと訊いている・・・・・・・・！」

「「！？」」

それでも高ぶる感情が抑えきれず、言葉に滲み出てしまう。

その怒りの意味が分からず、漏れた感情に気圧されるフェイトとアルフ。

そして、士郎の放つ怒気に気圧され、アルフがついつい口を滑らす。

「——あ、あたしじゃないよ。あたしがフェイトにそんなことするもんか！ やったのはオニババだよ！」

「ア、アルフ．．．！」——誰だ、それは．．．？」

「フエ、フェイトの母親だよ．．．。あの女、フェイトが集めたジェルシードの数が少ないって、鞭で酷いことしたんだ．．．．．今まででも特に気に入らないことがあるとよく怒ってたんだけど．．．さ、最近は特に酷くなってきた．．．．．」

「．．．．．そうか．．．．．」

士郎の予測は、当たって欲しくない予測は見事に当たってしまった。これでフェイトの悲しく、寂しそうで、絶望を秘めた目の理由がハッキリした。

子供、特にフェイトのような年齢で母子家庭では、母親はその子供にとって世界そのものだ。その子の全てだ。

母親にそのような虐待を受けているのでは、無理もない。

そして、そのような立場にいる母親が、フェイトのようなこんなにも優しく素直な子供を虐待していると言う現状は、士郎にとって許しがたいものだった。

——ギリツ．．．。

その音は、士郎が怒りを抑えようとして奥歯を噛み締めた音だった。しかし、一向に怒りは収まらなかった。

士郎の怒りの形相と、そこから発せられる怒気に気圧され、しかしなぜ自分たちと関係ないはずの士郎がそのような感情を見せるのかと困惑するフェイトとアルフだった。

「．．．．．気が変わった．．．．．ゆっくり風呂に入れる気分じゃない．．．．．オレはこのまま休ませてもらうぞ．．．．．」

そう言つて士郎はリビングのソファに横になってしまった。
暫らく士郎の様子を見ていたフェイトとアルフだったが、お互いに顔を見合わせるリビングに出入りや通信を探知する結界を張つてフェイトの自室へと向かった。
その間も、ある程度収まったとはいえ、士郎から怒りの気配が消えることはなかった。

interlude

自室へと戻つたフェイトとアルフは、あの奇妙な少年について考えていた。

初めて出会つた状況は極めて特殊だった。

なにせ空間の裂け目から突然大怪我を負つた姿で現れたのだから。

2度目に出会つたのは、管理局が介入してきたあの臨海公園での出来事だった。

フェイトや『あの子』にも破れなかったバリアを粉々に破壊して、大木を灰が残らないほどまで焼き尽くした。

その次は昨日の戦闘。

突然現れて、その驚異的な戦闘能力で助けてくれたかと思うと、ジュエルシードをこちらに渡してきたのだ。

しかもその後、自分を連れて行かないと邪魔をすると言つて脅してきた。

でも、奇妙なことに敵対する意思はまったく感じられなかった。

そして極めつけが今日の一連の行動だ。

自分たちが目を離れた隙にバインドから抜け出し、しかし逃げるでも管理局に通報するでもなく、料理を作つて待っていたのだからおかしいと言ひようがない。

だが。

「…………彼の作ってくれた料理、とってもおいしかったな……………」

「そうだね……。あたしもね、あの料理を食べたとき凄く驚いたんだけど、こう……。なんともいえない暖かさって言うか幸福感って言うか、そういうを感じたよ。…………まるで、リニスがいたときに料理を作ってくれたときみたいに。…………もしかしたら……………」

フェイトは、アルフが言わなかった先の言葉が分かっていた。

「うん。もしかしたら、味もそうだけど、そういう感覚もリニス以上……。かもね」

リニスはとても優しくかった。今でもずっとフェイトもアルフもそのことを忘れてはいない。

しかし、あの少年は捻くれてそんな性格をしてはいるが、料理からや食事の時に感じられた優しさや暖かさは、そのリニス以上だった。正確には優しさの質とでも言うべきか。

フェイトにとって、今までに感じたことのない優しさだった。

最も近いのは昔の母親から感じた優しさだろうか。

その所為で、フェイトもアルフも彼を敵だとは思えなかった。

そして、フェイトの傷を見たときの怒りの感情もそうだった。

「…………彼、怒ってたね……………」

「…………うん……………」

「・・・驚いたけど、気圧されたけど・・・なんでかな・・・
・・・全然怖くなかったの・・・」

「・・・」

アルフにはその理由が少しだけ分かった気がした。

彼が怒っていたのはフェイトに対してではない。彼女の母親に対してだ。

彼はフェイトのことを想って、そして心の底からフェイトのために怒ったのだ。

だから、自分もフェイトも恐怖を感じなかった。

（・・・あいつはまだ油断できない。・・・けど、絶対に敵にはならないような気がする・・・）

アルフはそう思った。

それだけ彼は真っ直ぐだった。

一見ひねくれているように見えて、性根はただただ真っ直ぐだった。少なくとも、アルフも、そしてフェイトもそう感じていた。

（・・・あいつなら・・・あいつなら、本当に・・・
・・・信じられるかもしれない・・・）

（・・・あの人は信じられる。・・・なんとなく・・・
そう感じる・・・なんでだろう？）

そうして、2人はどこか落ち着いた気持ちで、なぜか安心して、この街を訪れて以来体験したことのない深い深い眠りについた。

i n t e r l u d e o u t

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4174n/>

魔法少女リリカルなのはFate ～赤き錬鉄の魔術使い～

2010年10月9日01時39分発行